

史料紹介

花房義質関係文書 明治七年「日記」

齋藤 洋子

【解題】

はじめに

明治六年（一八七三）二月八日、駐露臨時代理公使花房義質（一八四二—一九一七）は、ロシアに向け横浜港を出発した。ヨーロッパを経由し、翌年三月二三日ロシア帝国の首都サンクトペテルブルクに到着。九年一〇月に帰朝するまでの間、日本公使館開設、マリヤ・ルス号仲裁裁判、樺太国境交渉など、日露関係の構築に尽力した。帰国後は、代理公使、弁理公使として朝鮮で衝に当たり、壬午の事変では九死に一生を得た。そして明治一六年、特命全権公使として再びロシアへ赴任した^①。

二度、六年余にわたりロシアに駐在した花房は、近代日露関係史を考えるうえで重要な人物の一人であるが、花房を中心に日露関係を論じた研究は少ない^②。しかし近年、日露関係における花房の役割に着目したMal'seva Svetlanaにより、「駐露時代（1883—1886年）の花房義質」^③、「アフガン近況論第二」―駐露日本特命全権公使花房義質の

報告書^④、「メルフ地方のロシア帝国併合に関する駐露日本特命全権公使花房義質の報告書」^⑤が、発表された。これらは、従来あまり注目されてこなかった、ロシアでの花房の言動を考察したもので大変興味深い。明治一六年から一九年の特命全権公使時代を対象としており、明治七年から九年までの最初のロシア駐留期に関する詳細な検討は行われていない。

そこで本稿では、花房がロシアに到着した明治七年三月二三日から同年末までのロシアでの日々を綴った、明治七年「日記」（当館所蔵「花房義質関係文書」^⑥所収）を翻刻、紹介することとしたい。

一 「日記」の構成

明治七年「日記」は、縦一七・八cm×横一〇・八cmの手帳に記されている。三月二三日から二月三一日まで、日付は全日書き込まれているが、日付のみという日もある。数日分をまとめて記すこともあったようで、後日読み返し、日付を訂正している箇所もある。また、

人名、地名などを失念したのか、或いは後日書き込もうとしてそのままになってしまったのか、空白となっている箇所も散見される。

一般的な日記の形式との相違は、日本で使用されていた太陽暦(グレゴリオ暦)の日付と曜日の後には、ロシア暦(ユリウス暦)の日付が記されていることである。日本は明治五年一二月に改暦したが、ロシアがグレゴリオ暦へと移行したのは十月革命後の一九一八年である。

また、「余は別に記す」との記述が数か所見られるが、関心があられ後日調査の上で詳述したい内容については、別にまとめていたようである。これに該当する可能性があるのが「魯都駐在中ノ見聞日記」⁽⁷⁾である。日記と併せて考察することで、花房のロシアでの日々がより鮮明になると思われる。今後検証していきたい。

二 ロシアへの赴任

花房のロシアへの赴任は、明治五年に生じたマリア・ルス号事件に端を発している。マリア・ルス号事件とは、天候不良のため横浜に寄港したペルー船マリア・ルス号に乗っていたマカオの清国人苦力を、日本政府が奴隷であると認めて解放した事件である。⁽⁸⁾翌六年、ペルー使節が来日し謝罪と損害賠償を求めると、日本政府は仲裁裁判にかけるところを提案し、同意を得た。外務卿副島種臣は、ロシアとの関係を重視し、早くからロシア皇帝に仲裁を依頼するつもりであったという。一方、それ以前からロシアに日本公使館を設置する必要性は認識され

ており、この機にロシア公使館の設置が決定した。⁽⁹⁾

当時、外務大丞であった花房は、マリア・ルス号事件の調査、裁判の立ち合いに従事するなど同事件の経緯に通じていたため、特命全権公使澤宣嘉に随行することとなった。しかし、療養中であった澤が出発直前の九月に死去したため、急遽、花房が臨時代理公使に任ぜられ、赴任。澤の後任となった榎本武揚が到着するまでの間、その任を勤めたのである。⁽¹⁰⁾

三 「日記」に垣間見るロシアでの日々

(マリア・ルス号仲裁裁判の準備)

花房の最大の任務は、マリア・ルス号事件の仲裁裁判の準備であった。裁判関係書類の準備、ロシア政府への書類提出、ペルー公使館との調整、日本外務省との連絡を適宜行っている様子は「日記」からもうかがえるが、ロシア政府との交渉内容など詳細については記されていない。外務省へ送付した報告書と比較すると、「日記」には誰といつ、どこで会い何を話したのかを簡潔に記し、それをもとに後日報告書をまとめていたと推察される。

裁判の当事国となっている日本とペルーであったが、両国公使館に敵対的なムードは感じられない。花房は、帰国するペルー公使と写真の交換をするなど(五月一六、一七日条)、他国公使館員と同等かそれ以上に親密な交流をしている。任務は任務として肅々と進める一方、

異国に在る外交官同士として心を通わせていたのであろう。

(日本公使館の設置)

ロシア到着後、最も苦心しているのは、公使館として借り上げる物件を契約することである。ロシア政府の役人などから紹介を受け、いくつもの家を内見したが、立地、規模そして予算に合うものはなかなか見つからなかった。やっと、条件に適う家が見つかり、交渉の末契約が成立したのは五月一二日のことである。

設置された日本公使館は、ネヴァ川に面し清潔な土地で、ロシア外務省にも近い好立地であった。役所部分は五〇畳で客座敷二間、居住部分は四〇畳一間と寢所一五畳一間、六畳一間であったという⁽¹⁾。花房は、他の館員らと共にここに寝起きし、榎本もまたロシア到着後、公使館内に居住した。

(ロシア帝室への謁見)

花房は、ロシア到着後間もなくの三月三〇日に皇帝アレクサンドル二世、四月五日に皇后、四月一日にコンスタンチン・ニコラエヴィチ親王(皇帝弟)他一親王、四月二八日に皇太子アレクサンドル(後のアレクサンドル三世)へ謁見した。

明治五年一〇月、世界周航の帰途来日したアレクサンドル皇太子を明治政府は国賓待遇で迎えた⁽²⁾。花房らの謁見時、皇帝は「先年倅の貴国に在し時は、皇帝陛下を始め上下の厚待を受け謝々無量なり」と、皇太子もまた「昨年の更に記憶に上り来る厚賜、常に此記憶を保持する之僕なるへし」と、日本の接遇に感謝の言葉を述べている。

日本とロシアの間には、樺太をめぐる領土問題が存在していたが、ロシア帝室は日本に好感をもっていたことがうかがえる。

(各国公使館員・ロシア要人らとの交流と情報収集)

花房は体調不良の日を除き、毎日各国公使館やロシア要人を訪ねている。外交官の職務である情報収集にも余念がなく、アフガニスタンを巡るイギリスとロシアの駆け引きなど注意深く観察している。

花房が交流を持ったロシア人の中で、日本人に最も馴染みの深い人物は、プチャーチンであろう。ロシア皇帝ニコライ二世の命を受け、徳川幕府と日露和親条約、日露修好通商条約を結んだ人物である。日露和親条約締結のため交渉を開始した安政元年(一八五五)、大地震が発生した津波によって下田湾に停泊していたロシア船ディアナ号は大破し、修理のため向かった戸田で沈没。幕府の援助と戸田の住民の協力を得て新たな船を造船し帰国した。条約締結の功から伯爵を授けられたプチャーチンが作成した紋章には、ロシア帝国の紋章である双頭の鷲を描いた盾を挟みロシア使節と日本の武士が描かれている⁽³⁾。この紋章が示しているように、プチャーチンは、日本、日本人への感謝の念が強かった。

榎本に随行した市川文吉は、慶応元年(一八六五)幕府からロシアへ派遣された六人の伝習生の一人で、他の五人が帰国し一人になると、プチャーチンの家に引き取られ勉強を続けたという⁽⁴⁾。

「日記」の記述中でも、プチャーチンは日本公使館員を夕食に招待したり、公使館探しへ助言をしたりと親切に接している。花房は、プ

チャーチンを温和な君子、家族もまた温雅であると記している(四月三日条)。

(異文化体験)

復活祭(四月一日条)、騎兵隊の演習(四月三〇日、一二月五日条)、親王主宰の競馬(七月二七日条)などの行事に参加したり、皇帝の誕辰(四月二九日条)や聖ゲオルギ勲章制定一〇五年式典(一二月八日条)に賑わう市街を見学し、その様子を書きとどめている。日本とは全く異なるロシアの行事や文化が、花房の目に新鮮に映ったことは想像に難くない。一方で、異文化と触れ合う中で、日本の有り様にも思いを馳せている。

八月二八日、アレクサンドル二世の三男ウラジーミル親王とメクレンブルク＝シユヴェリーン大公フリードリヒ・フランツ二世の娘マリアの婚儀に参列する。礼拝堂入室の際、トルコ大使は係員に促されて、自国では非礼にあたる脱帽をし、顔を紅潮させた。それを見た花房は、「礼を曲て時宜を折衷」せざるを得ないのもまた、国治の深淺、開化の遲速、国力如何によるのだと感じる。日本を顧みれば、明治維新から七年余、「衣冠を改め、坐立を革め」るなど、急速に西欧近代化を進めることに些かの戸惑いを感じながらも、そのおかげで屈辱を免れ、「怒らねはならぬ憤を免かれた」益は少なからずと綴っている。

(寺島外務卿への不満)

前述したように、花房がロシア駐在を命じられた最大の理由は、マリヤ・ルス号事件の事情に精通していたからであり、副島外務卿の懇

願を受けてのことでもあった。¹⁵⁾しかし、明治六年政変により副島は野に下り、後任には薩摩藩出身の寺島宗則が就いた。

四月六日、駐日ロシア代理公使オラロースキーから届いた書翰には、寺島外務卿と前任の副島に対する見立てが記されていた。寺島は、「才ありと雖も人を制する之力」はない。岩倉は大久保の意見を重んじ、寺島の声は「政府中にては無に等し」い。副島は「岩公も恐れ人民も又伏し」ているので、「此人外交を取る時、則海外之事務に付て之論は可否ともに政府の論する所、下人民の論する所と同じきに至るへし」と評していた。オラロースキーの目には、寺島は外交担当者として頼りなく映っていたようである。花房もまた、寺島に不満を抱いていた。一〇月一四日の日記には、今年一月から一四通の書翰を送ったが、返信は外務少輔である山口尚芳か上野景範が外務卿代理で記名したもので、未だ一通も寺島自らが記名したものは届いていないと記している。こうした状態は「レスポンスブリーチ」を荷ふ積りありても、見事に抜け「ているように見えて、「一向に不安心」である。「怠慢」か、「軽率」か、それとも「事を取る能わさる」のか、「書を裁して其意を問ふ」と、厳しい言葉を並べている。外務卿が記名した返信がないことを、自分たちの報告に無関心のように思え、不満を吐露したのであろう。「日記」中、これほどまでに感情移入をして綴っている個所は少なく、花房が寺島の対応に不満を募らせていたことを示している。

四 「日記」に登場する人々

日記では苗字のみが記されているので、頻繁に登場する人々を簡潔に紹介しておこう。

花房と共にロシアに赴任したのは、二等書記官中村博愛、三等書記官志賀親朋(七年八月に一等書記生から陞叙⁽¹⁶⁾)、一等書記生山内勝愛、三等書記生内藤忠順である。特命全権公使榎本武揚と二等書記官市川文吉は六月ロシアに到着した。市川と志賀はロシア語に通じていたため、榎本、花房の通訳を務めている⁽¹⁷⁾。榎本始め公使館員と留学生西徳二郎、寺見機一が、公使館内に同居していた⁽¹⁸⁾。なお、中村はフランスマルセイユ領事館の領事に任ぜられ六月二六日に、山内はオーストリア公使館に転勤となり八月二〇日にロシアを発っている。

同時期、イギリスに本野盛亨、フランスに鮫島尚信、中野健明、厚東樹臣、ドイツに青木周蔵、品川弥二郎、オーストリアに渡辺洪基、イタリアに河瀬真孝が駐在しており、様々な情報交換をしている。また、イギリス留学中であつた弟、金次郎とは頻繁に書翰を往復している。

注

- (1) 花房の履歴については、黒瀬義門編『子爵花房義質君事略』小林武之助、一九一三年、「花房義質」(国立公文書館所蔵『枢密院文書・枢密院高等官転免履歴書 大正ノ一』、枢0078100)を参照した。

- (2) 犬塚孝明『ニッポン青春外交官―国際交渉から見た明治の国づくり』日

本放送出版協会、二〇〇六年、九七―一二九頁は、当館所蔵「花房義質文書」などを引用し、マリア・ルス号事件や樺太国境交渉を通じて花房が日露関係に貢献したことを指摘している。

- (3) 博士学位論文(大阪大学、二〇〇九年) 以下のURLで公開されている。
<http://hdl.handle.net/1194/826> (最終閲覧日:二〇二〇年一月三日)。

- (4) 『問谷論集』(三) 日本語文化教育研究会編集委員会、二〇〇九年、一一九―一三二頁。

- (5) 『セーヴェル』(二五) ハルビン・ウラジオストクを語る会、二〇〇九年、一二五―一四二頁。

- (6) 当館所蔵「花房義質関係文書」の全容は、柴田紳一「花房義質関係文書について」(『外交史料館報』第七号、外務省外交史料館、一九九四年) 八二―一二頁を参照されたい。

- (7) 前掲、「花房義質関係文書」F―二九。

- (8) マリア・ルス号事件については、「条約未済秘密露国風帆船『マリヤ、ルーツ』号清国拐民攬載横浜へ入港ニ付処置一件」(外務省外交史料館所蔵、36312)、森田朋子『開国と治外法権―領事裁判制度の運用とマリア・ルス号事件』吉川弘文館、二〇〇五年、醍醐龍馬「明治政府とマリア・ルス号事件」(中村喜和、長縄光男、沢田和彦、ポダルコ・ビョートル編『異郷に生きる―来日ロシア人の足跡』六、成文社、二〇一六年)、同「マリア・ルス号事件をめぐる国際仲裁裁判―日本勝訴への道」(『まちなか法政ジャーナル』二(大阪大学法学会、二〇一二年) 一―三一頁、森田三男「マリア・ルス号事件と日露関係」(『創価法学』二二(二二) 創価大

- 学法学会、一九九二年) 三一六―三五〇頁、N・S・キニャビナ、森田三男「マリア・ルズ号事件と露日交流の見直し(一六九七―一八七七)」(『創価法学』二二(四)、同前) 六五―九四頁、松村正義「マリア・ルズ号事件の広報外交的性格」(『帝京国際文化』九、帝京大学文学部国際文化学科、一九九六年) 一―五二頁などを参照されたい。
- (9) 前掲、『子爵花房義質君事略』、八九―九〇頁。
- (10) 「明治六年九月一等書記官トシテ露国駐在ノ命ヲ受ケタル当時ノ事情及露国事情等ノ抜粹」(前掲、『花房義質関係文書』F―二二) は、花房がロシアに派遣されたこととなった経緯を綴ったものである。なお、同史料は、名和悦子「国立公文書館所蔵公文録、外交史料館所蔵『花房義質関係文書』及び岡山県立記録資料館所蔵『花房端連・義質関係資料』から明治六年政変前後の日朝関係と副島種臣の東アジア政策について」(『研究論集』一四、河合文化教育研究所、二〇一九年) 一三―一六頁で翻刻紹介されている。
- (11) 榎本武揚『シベリヤ日記』南満洲鉄道総裁室弘報課、一九三九年、二九〇頁。
- (12) 宮内庁編『明治天皇紀』第二巻、吉川弘文館、一九六九年、七七〇頁。
- (13) 町田明広「安政東海地震とブチャーチン・デアナ号の遭難と日露友好(日本研究所主催講演会要旨)」(『神田外語大学日本研究所紀要』六、神田外語大学、二〇一四年) 一〇四―一〇五頁。
- (14) 宮永孝「幕末ロシア留学生市川文吉に関する一史料」(『社会労働研究』三九、法政大学社会学部学会、一九九三年) 一三六―一三七頁。
- (15) 前掲、名和悦子「国立公文書館所蔵公文録、外交史料館所蔵『花房義質関係文書』及び岡山県立記録資料館所蔵『花房端連・義質関係資料』から明治六年政変前後の日朝関係と副島種臣の東アジア政策について」、一二三頁。
- (16) 「元外務三等書記官志賀親明特旨叙位ノ件」(国立公文書館所蔵『叙位裁可書・大正五年・叙位卷二十五』、叙0054100)。
- (17) 前述したように、市川は安政元年に幕府の伝習生としてロシアへ派遣され、幕府崩壊後も同地に留まり勉学を続け、明治六年帰国した。山内も、市川と共に派遣された伝習生の一人であったが、体調を崩したため慶応三年(一八六七)三月にロシア滞在約一年で帰国している(註14)。
- 長崎出身の志賀は、少年時代からロシア人に接し独学でロシア語を学んだ後、箱館ロシア領事ゴシケヴツチの通訳となった。慶応二年に樺太国境交渉のため派遣された遣魯使節に通訳として随行した(杉本つとむ『十八・十九世紀日魯交流人物史話』、東洋書店、二〇一三年、二二八―二三四頁)。
- (18) 注11に同じ。

【史料】

【凡例】

一、本史料は、当館所蔵「花房義質関係文書」所収の明治七年「日記」(分類番号…書翰―F―二四)の、日記部分を翻刻したものである。十二月三十一日の日記以降に記されている、写真の送付先などのメモ書きは割愛した。

二、本文の表記および傍注について、以下のような原則をとった。

(一) 漢字は、固有名詞を除き常用漢字に改めた。

(二) カタカナ表記は固有名詞を除きひらがなに直した。

(三) 変体仮名、合字はひらがなとした。

(四) 適宜句読点を付し、罫字、平出は詰めた。

(五) 訂正や挿入の書き込みは、煩雑を避けるため整除した。

(六) 判読不能な文字は□で示した。

(七) 文中の空白は「」で示し、文が途中で切れている個所は「以下空白」とした。また、空白部分の文字が他の史料などから推定できる場合は「」内に記した。

(八) 欄外に書き込みがある場合は、該当する本文個所に「欄外」と記し、その内容を記載した。

(九) 誤字、脱字等がある場合は、「」で案を示すか、「ママ」を原則として右行間に付した。

(一〇) 必要な場合には、「註」を付した。

(一一) 今日から見て不適切な表現、あるいはプライバシーに関わる

内容についても、歴史史料の性格上そのままとした。

明治七年三月廿三日午后八字、彼得堡に到りホテルデ、クレーに宿る。蓋、昨日ワルシヤワより電報せるを以て、其稚丁を汽車駅に来しドロシケ車荷車等を用意し待てり。伴て其舎へ就き室を定む「旅舎ソボロフに○ウランガリー氏を訪ふ。不在。偶然海軍士官」。「両氏に遭ふ。其室にて暫時談話して帰る。」「氏は嘗て対州浅海^{アツク}に來りし」「艦の船将」「之男也。志賀曾て知る人也。

○中村書信を來せるあり。中に曰、十九日迄パリを去能わさりと。故は、曾てローマにて河瀬方より用金立替を乞ひたるを返済せしに、其至れるや否を審にせざるによると。然るに、同氏我職務に付て外務卿に呈すへき信書を捧持したれば、速に來るへきを促すため電信をパリ、ヘルリン両所へ送る。

○二十四日

朝ウランカリー氏を訪ふ。面晤頃刻。終て表衣を命し沓を誂らへ名刺を作らしむる等に駆廻る。

昨夜電信ブーセーより來り。礼服成就し事を告げ、且二十日に送り出せるよしを云。○今夜ベルリンに在る品川へ当て、中村之何日來り能ふへき哉を電信にて問合す。引違えて中村より電信あり。明朝ベルリンを發すへしと。然れば二十七日朝晩之中到着するなるへし。○西徳二郎○ヤマトフ橘孝齊來話。嘗て箱館之岡士たる人ゴスケウイチ氏之男「ワジメル」來り伴食す。

此日、志賀外務省へ行き本省之來信を得て帰る。十二月廿日認之ものと第一号一月廿五日認第二号となり。家信も籠れり。家大人之書中、太郎かはひまわるとの事あり。

○二十五日

又ウランカリー氏へ至り面晤。信書の中村と共に来るに付、予か外務省へ行きかねる事を述べ、其他談示事あり。

○高木報藏、古川常一郎来る。嵯峨寿庵も晩に高木と伴ふて来る。夜近街に車を駆。

○今午飯はウランガリー氏を招きて伴に食す。

二十六日

家居、取片付もの。又外務卿其他初面之談話振など考定。余無事。

二十七日

今日ホテルソーボルフに転居。街名、家名、審に記すへし○午後、志賀外務省亜細亞寮にいたり、

予等明日登省すへきに付、卿に面晤之時間之便を問ひ期するに十二時を以てす。○十一字中村ベルリンより至る。共にソーボルフに至り宿せり。

○今晚ペリウ公使ヘーシンク書を送り来せり。ヘーシン、パリーに面会せざりし遺憾を述べ、次に秘公使を紹介するよしを龍働にて書し也。ヘーシンは直にペリユーへ行くため、一応ゼムマンまで帰るよし也。

二十八日

午十二時外務省へ至り、太政大臣兼外務卿プリンスゴルチャコフ殿下に謁し信書を呈す。○謁帝を乞。○ペリー船マリヤルーズ一件仲裁を

乞ふ事を告ぐ。○昨年親王之來航、皇帝より官民に至て皆其交際之益親密なるを欣ふよしを述べ。

○岩公之手より御送寄之聖上御写真を渡す。

○信書落手。交際之親密を賀せられ

○謁帝之事は可伺と被答。

○マリヤルーズは承諾せり可奏上。其前一応之書類を見たし可差出と也。

○親皇之御接待厚かりしを謝せられ

○御写真を拝受し懇命を厚謝する由を述べ。

終て退き亜細亞寮へ至り、頭スツレモウーホフと明後三十日即月曜日十二時来て、マリヤルーズ一件関係書類を示すへきを談し置く。此日、スツレモウーホフへは最初に対面し、續て寮助ウエルツキーへ紹介し、又予等を伴て卿の前に到るなど周旋至れり。我仕節小出竹内等之來りし時、皆此人之談判せし也。ウエルツキーは、岩公の來れる節接待掛りとして常にホテルに來往せし人也。今度も今日を初とし内外公私無隔意談する人也。

○晩アンソンコッフ老婦之家を訪ふ。在日本代理公使スツルーウェー妻之母也。グラフ「」をも訪ひ面す。但し昨日來訪あるに答る也。

○ビュツオフ氏細君を訪ふて其父母共に面す。又アトミラールポシエト氏を訪ふ。不在。依て去らんとする時、細君歸來。談話中アトミラールも歸來。其日本室に談話して帰る時、既に六時。○ウエルツキー氏留守へ來り。名帖に明後月曜日謁を賜るよしを記して去らる。故に其

委細を知らんとて其宅へ行くに不在。依て亜細亜寮権頭ヲーステンサーケン氏を訪ひ面晤。委曲を問ひ、尚明日ウエルツキー氏の来りて委曲を示さるべきを約し、且バリーより至れる礼服の税関に在るを、明日日曜日たるに閑せず落手し度旨を談して帰る。

二十九日

亜細亜寮頭スツレモウーホフ氏来訪。明後日之礼式等示さる。続てヲーステンサーケン又ウエルツキー氏も来り。丁寧談示し、ウエルツキー氏は言上の口上案を魯語にて述べ、志賀に示し丁寧配意あり。

○今夜アン子ンコッフ老婦招かる。志賀と共に行く。娘「「婚」」あり。○今年後礼服落手。ウエルツキー奔走此の便利を得たる也。○沓沓足は誂らへたるものに不合。故に晩買ふたり。

○三十日 月曜日

朝昨日の沓を替え帰る。○ウラン氏来話。今日之礼式等に配意のため也。昨日諸人の来示の旨を告ぐ。○満人「「来話」」(此人性格極めて美人の大衆なる趣あり。同類也として親む意あらんと見ゆ)午後一字半出門参朝。式部寮属伴て一室に至る。式部頭出て接す。漸くにして予を召して書室に入しめらる。

志賀通訳懇篤丁寧也。退出後、宮内卿、外務卿、式部頭之宅に就て賜謁を謝し、各国大使を巡勤す。仏、独、英、土、奥也。

三十一日 火曜

外務輔「「」」亜シア寮頭スツレモウーホフ氏之宅を訪ひ○米。蘭。白耳義。葡萄牙。瑞典那回。バヴァリヤ。ウルテムブルグ。ス波亜。伊太利。丁抹。ペルシヤ等之公使館を廻勤し、日耳曼、奥太利の軍事

官を廻勤し、且前諸公使館附軍事官及び書記官等へ凡て名帖を投して帰る。秘魯公使は宿所不分明なるを以未至。

四月一日 水

過日、月曜日謁見之故にスツレモウーホフ氏と約せしマルヤルーズ一件書類を送るを遅引せる故今日持参せしに、同氏不在故寮属「バロンローズエン」に附し其旨を口伝し明日十二時を約し、序に秘公使館を聞き帰る。帰後秘公使を訪ふ。不在故名刺を投して帰る。

○寮属「バロンローズエン」来り、秘公使へ訪問の欠たるを聞て注意を^(ヨル)するよしを述べ、且明日十二時は不可也、十一時可也と告ぐ。

○スツルーウェー氏に其宅へ面し、諸省長官を訪ふは皇族賜謁之後ならては不可あるや否を問ふ。可なりとおもえども、他人の不可といふものあり。スツレモウーホフに談して可答と也。○書記沓人見付たりとの事也。明日可送来と云。

二日 木

十一時外務省へいたりスツレモウーホフ氏に面し、昨日出したる書は往復書翰とプロトコールのみなり。別に少し関係の書もあれども、凡て証拠とすべきものは後日揃て出すへし。今は唯其始末を知るに足るものだけを出すよしを告げ、且其中にプリンスゴルチャコフを出すへき書の草案を入れ置たり。これは唯口上手扣の如きものとなりたれば、寧出さぬを増れりとおもふよしを告たれと、兎に角訳成之上、上覧に供し其上受否の報あるべきや。尤受くるゝに相違なかれは、最早承諾なりたると本省へ御報知ありて差支なかるへしとの事也。故に其俣書

類は差置、帰後○電報を本省へ送り、皇帝仲裁許諾ありたりと申送れり。

○此日外務省にてゴスケウイチ氏に逢ふ。午後来寓。共に昼食す。○昼食中ポルトガル公使来らる。面話す。

○今朝Batropckii^(Батроцкий) ウエルツキーの名帖を以て来り。暫時話し、朝二字間晩半時間或は一字間来るべきを約して帰る。○午後外務省にスツルー氏に面せる節、給は百ルーブル最初はスツルー氏に渡、後は本人え月々百ルーブルを渡す筈の話に極る。別に約書なし。故は此男外務省中勤仕之人にて、其業間に来り勤る故也。英語もか也話し仏語もよくし、其他重細重欧羅巴六七語は充分に出来るよし也。

三日 金

昨日スツレモウーホフ氏に諸省長官廻勤差支有無を問ひしに、皇族謁見の有無に關せず廻勤可然と告らる。スツルーウエー氏にも其由を告げ、今日大蔵卿「」等諸省長官を巡廻し、プーチャーチンを訪ふ。出仕中に付暫時妻娘等と会話中帰来らる。七十余温和之君子と見ゆ。家族又温雅。尋常欧洲セントルメンの家とおなしからす。

○四日 土

本省へ之書信を封発す。○賜謁之記并に外務卿初見之記を送呈。マリヤルーズの事。御写真之事。等皆之に籠れり。

○田邊○森、塩田、立田。徳田へ名札。

○留守へ連名書翰と金次郎之別紙入金二、尚留学之事を申送る。

○パリより書を宮本と柳原とに当て、現今之模様報知を乞ふ旨を申

送れり。

○副島へ次韻し一首を送る。

○岩公へ負傷悔を云送る。

○寺嶋えスツルーウエ紹介、并其性質可任之職を告ぐ。

○森、塩田、宮本、上の、宮川、神田、大江等え添書してスツルーウエーに渡す。

○留守へもおなし指輪小兒衣と共に弔封之書を添托す。右備忘のため是に記し置く。

今朝スツルーウエー氏書を来し、明日皇后謁を賜ふべきを告ぐ。午後式部頭より達書来る。明五日則日曜日魯二十四日皇后謁と云。

○バトロスキー来る。新聞話兩三件、別に記す。

○五日 日 魯廿四日

朝、志賀スツルーウエーに至り、宮門之何れよりして可なる歟など、連書中不解之廉を問ひ来り。且宮内一等官諸人え廻勤之要不要を問ふ。甚要ならずと雖も又可也と云ふ。

○バトロスキー来る。○仏国諸党の相争ふ趣、去「」日ナボレオン^(Napoleon Bonaparte) 幼年ながら又仏帝位を求る之菅人にしてウールウィチの学校を終業もせず、一砲を専任せられかねたる身を以て、仏国を平穩に治むべきの談話ありたりとの笑話あるを告ぐ。其他

仏党はDuc of Broglie (当今内務卿にして諸省長官會議之頭領也)。当今之共和党也。

外務卿はCharles Elic Duc Decazes

ラジカル党 —

レパブリカン党 — Repubrick

ボナパルチスム党 — Napoleon

モナルキカル党 — Orleans

モナルキカル党 — Restonex

〔欄外〕 Chihavet は仏后皇子 仏帝セタン降参之後住居之所也。

○英国議院、英の在魯大使新聞紙中キワと魯との条約を乗せたるものを本国に送る。本国外務卿グランヴィル之を議院に送り副て句に此約書中、若し去年コントシュヴロフ来り話せしに違ふ事ありとも強て論する事なきを要すと。其故は、六十九年中英大使ブツカナン氏魯に在りし時コルチャコフ氏の言に、魯国假令キヴを取るも決してアフガニスタンに手を付けずと云ひ、又亜シヤの事に付魯へ来しホルサイト^{別に調へし}氏の談の節、ゴルチャコフ氏が在英魯大使ブルーフに書送せるにセルアルハンの所有常にアフカニスタンの境なるへしと云、又英政府は其セルアルハンをして境を謹守せしむへし。魯はブハラ王をして勉てアフカニスタンと平和ならしむへしと云ふ。又ブツカナンとの談もコーカン、カンは魯之許可なくして何事もなし得ざらしむへしといふ事あり。如此は英政府も魯政府の所思趣向極明になるを許せり。

〔欄外〕 プリヴィーチャンセロリーの第三秘事、掛り即セクレデの主演なり、コントシュヴロフは昨年英へ行婚儀調談せし人也。

〔註〕「キヴ」とは、ヒバ・ハーン国 (Khans of Khiva) のこと。前年 (一八七三) にロシアの保護国となっている。

○然るに、英政府アフガニスタンを平和ならしめんと尽力すれども、魯軍日々々々其境へ迫り来る。是其不安之起る所以也。去年來魯軍メルヴに出来るへきの評あり^(メルヴはトルコマシの其近辺に住居するを以て此説あり)。

若し此挙ある時は、アフカニスタ安き能わす。然もプリンスゴルチャコフの論説、極て穩当也にして不得已ものあり。曰、魯軍一地を取る元是不得已に出つ。然るに其近地皆之を恐懼し疑訝を抱き、終に魯軍へ害を加ふるあり。魯軍之を制せんとすれば、又一地を進まざるを得ず。必竟元其境界不明に起る也。故に新地へ境界を定めイシクル、シルダルヤ川チエリメントの城市を以て限るへしと。然るに限を是に置く能わす、終にタスカント、ホセント、サマルカンを取るに至れり。然るに又其近地之人、疑懼によりて其方向を魯へ定めん事をおもふに至る。是に至て印度之英領得た如何之論あるへきや。

○(エシエル、ヲフ、カブル^重に乞ふて之も又魯に属せされは、安からすといふに至り。又曰、魯政府トルコマンを平和ならしむる歟。然らされは之を廢て罰せん事を乞ふと云。英の印度副王之を許諾し、且曰、魯政府決して汝を害せず、又決して其現今の境を越さるへし。且我今魯政府に書を遣りて、魯政府をして汝等に平穩を保つを約せしむへし。且おもふに、アフカニスタンをして永久中立独立国となす之如しとの事あり。

此余別記に付す。

小間之記録解しかたき事多し。後日考定別録すべし。

○午後十二時半より徐に寓を發し冬宮に至り、皇后門より登り宮内属

之案内につれ内宮に至る。途中兵隊銃を肩へしに捧持して礼をなし、又は剣を捧けて礼をなして立つ。皇后宮の戸外に黒奴^{アジ黒}の守門三人あり。戸を入れば、典侍并に宮内卿等接待暫時にして、ペリウ公使奥室より下来。次て予等を召す。志賀と共に入る。談話大体皇帝之言と大同也。次に中村初三人を呼び入らる。又談話兩三語を云してより入らせらる。居残りて後退出つ。一応、帰後宮内^{「業見るへ」}等官諸子へ手札を投し○其後「以下空白」

○桜田に書を送りて過日北地の事に付心添を謝し、新聞を乞ふ。

○河瀬に平産を駕し、新聞を乞ふ。

○渡邊に宮森之手紙拔書を送り、山勝之事の過日の書翰に書余れる意を述へ、山崎之留学成否を問ふ。

○副田書を來し、其帰朝佐のへ従行と決せしを告越し、且本日英に行くを告来る。

○副田へ書を送り、其帰朝決せしの却て可賀を述へ「以下空白」

○夜少しく近來之筆記をなす。

○ウランガリー氏書を來し明晩來り能わさるをいひ、且其失儀を陳し懇意を謝す。

○去る廿九日認め仏公使館よりの來信、昨日落手中に書生之事に付厚東之書あり。中村に渡す。○去月廿日「以下空白」

六日 月 廿五日快晴 着魯後初て此快晴を見る。

朝ウラン氏に至り面晤。横浜ヲラロースキーより書を來し、日本当今之有様を告げ、且朝鮮征伐之事なくして人心不可靜止之趣也と告來し、

又必らず遠からずして政府重臣之變換あらんとおもふよしをも告來れりと云。其序に同氏の説に、寺卿才ありと雖も人を制する之力なし。岩公恐らくは大氏之説に信拠し、寺氏之声政府中にては無に等しきもの、如しとおもうふ也。副氏は之に反して、岩公も恐れ人民も又伏したれば、此人外交を取る時、則海外之事務に付て之論は可否ともに政府の論する所、下人民の論する所と同じきに至るへし。同じきに至らは挙止動靜は政府の意之俟なるへし。今、日本政府士族へ家録^(録)を与え之を扶持し、其もの軍に従事せん事を欲す。若し他に軍に従事せずんは、内必らず自ら治むへからざるに至らん。近來廢録^(録)の論なれとも、今の勢を以てすれば、一時廢すれば窮するより乱をなすへし。然れば、此録^(録)内に養ふにも必らず与えざるを得ざるか如し。同じく与るものを以て半を外に用ひは、又甚た利あるもの、如し。いつれにも人民之論然りと聞けば、人民の伏する所の人握權するに非されは、其異論は不可防ならんと。

○バトロースキー來る如例。

○ゴロロス中にて見たるに後來英新聞に注意すへし。一月七日付グラソヴィルより在魯英大使ロードロフチユスエ書を來し、中央亞細亞之事に付魯之キヴと結へる条約に付、其条前年コントシエワロフの言に違える事あるも関意せされとの事を議院に言たりとの事を報し、必竟魯之アフガニスタンを侵さるを契て固かしめんとするよしをいふ。其旨大使魯外務卿にいえりしにより

○一月廿一日付を以、在英魯大使ブルノフエプリンスゴルチャコフよ

り書を送りて、アフガニスタンの境を侵さるへきを述べ、且トルコマンの其境場に去留徘徊せるものも、魯人の交易を妨さる間は更に此ものどもの挙動にも関せざるへけれども、其妨害不可許を犯す事ある時は又之を罰し、勢不得已は兵を用る事あるも又不可知との答あり。

○午後アレキサンドル劇場之傍に「」の二百余枚之画額を展覧せるを観る。此画は同氏か六年間キヅに留りたる間に作る所といふ。大なるは八尺余、小なるが尺に盈さるもあり。別に數百餘あり後可説事油画にて未見之蜜情を尽せり。

○カザンスキーソボルといふ寺觀に登る。方形に両翼を具し羅馬のピエルに似て小なる寺也。ナポレオン第一世魯都に攻入し時、残し去たる金銀を取りて用ひたるなりとて、柵欄額柱其外金銀を用ひたる事夥し。其節ナポレオンを逐斥して功ありしヒールトマルシヤル Barclay de Tolly 及び Kutusoff-Smolenski (Kutuzov-Smolensky) の鉄像を両翼の両端に建てたり。其 Kutusoff-Smolenski 墓は此寺の入口左側に在り。即、千八百十二年出陣に臨て来り拝せし場に葬れる也と云。

○夜ゴシケウイチ、バロンオステンサケン、ウエルツキー氏来晩食。

○バトロスキーも予等五人と共に連盤飲飲。

○画工「キヅの画二百余を六年に造れる男也」某印土を経て日本に来るへしとの事也。

○魯皇帝、英行發途は五月十九日にして、六月廿五日頃之帰港あるへしと也。

○昨廿四日即六日附コルチャコフ殿下之公書を落手す。中に云、マリヤルーズの事仲裁之請求は、両国政府の意趣の如く皇帝陛下之を諾せ

られたりとの旨を述ふ。(バトロスキーに托して英文に訳せしむ。原は仏なり)此書を殊に英に訳するものは、他の此件に関せる書皆英にて上木したれば、是も亦英にしたる方便也とおもふて也。

○七日 火 廿六日 曇

ゼ子ラールスツルーウエー来訪。日本在留代理公使スツルーウエ氏の兄にして、ブルコ司天台の司長也。魯領内司天台十九を支配し総長たりと云。其子某、今年金星太陽を過るを見るためウラジヤストクエ行く人々の伴に入れり。帰り日本に其叔を見るならんと云。

○ウラジヤストク、当今一周日毎にアムール即ニコライスキーよりの通船ありと云。長崎よりは凡二昼夜の道也。我兵艦も速に其場に至り現地を見置度事也。

○バトロスキー氏来る如例。

昨日托し書翰之英訳成る。此書九百十九号にて魯曆廿四日認五日到來せり。○山内の預り公書之中に入る達「以下空白」

○英吉利河岸に公館とすへき家ありと昨夜ウエルツキーの話しある故、今日バトロスキー氏を遣りて見せしむ。晩飯頃來報して、同家は河流に面し三大室其外廿二室あり。二階立之馬車屋厩仲間部や等もあり至極適当とおもふ。乍去、働老年六千ルーフルと云ふよしを云。加るに、若し年数を以て約せば或は三千四千之間に下すも知るへかさるの趣も見ゆるといふ。蓋し昨夜ウエルツキー子の話にも三千五百計りとの事あるによる也。

晩食後地図を検す。此図は、地理、山脈、河、流水の深淺、山の高低、

土質の鉾類を含蓄せる度、植物に適せる度、人民繁殖之疎、密、都人、市人、野人、男、女、商売、農、兵、死、生、結婚、増減、製造の品類及び其多寡、法教之区別等に至るまで、地図上に明にならしむるの趣向にして、イルイ子氏の著す所也。

○夜十字本省之來書を得、二月十五日認と見ゆれと日付は欠けたり。

○去年十月「」楠溪にて魯兵之罪人逃走せしもの、衆右衛門米次郎などといふ木挽方にて物盜たる序に打合となり終に死したるとの一件書類来る。

○一月「」日認、ペリウ公使ガルシヤ北京認にて、魯帝に仲裁を託する事秘魯政府同意にて右依托し事を申立る、との旨を申越せりと報知する手翰に添たる英訳和訳の写を封入ありて落手せり。

○マリヤルズ一件仲裁魯帝に托する事、秘魯政府同意にて云々在北京ガルシヤより本省へ之書類写落手。

○マリヤルズ書類神奈川県上梓未成校合中に付、濟なは写にても差越すとの事。

○矢の次郎か近況報知之返翰。

○副田携妻不可論を書入たる書類「以下空白」

○宮本か近況を為知之手紙類^⑧の妙文なるを落手。愁中又解顧す。

○宅状は年始状也。且、金次水谷等の帰るを山尾井上なども勧めるよし云越し給える也。○祖母様は家内の近況、太郎の成長など、予か曾て尽せる奉仕を満足し給ふとの事とも書加え給えり。○おちつよりも一同無事之よし、老祖母に君の孫曾孫の世をよくなし給わる健康の

有様を告げ、太郎が取立などとする有様を告る也。○芝居に行たる事、□見に行たる事、太郎か人力車にて母様のつき相行なさる事、父様の出入に抱かれ奉る事などもありて、おもひやらるゝ事とも快し。

○此時の父様の書は為見るたる近々金次に送るへし。○此中金次の事○津田やの金之事あり。○岡田の傘○采散之画○竹田之画○竹坐之邂逅○「以下空白」

○八日 水

朝、英吉利河岸に公館を見るよし。然も住とせざる所ありて、暫く見合す。

午時秘魯公使來臨。去廿五日予と同じ書類を落手せり。然るに第二之プロトコール中、魯皇請を諾せらるゝの後十二月といひ、又其許諾之報を得るの後六月といふ兩条ありて、其判を初るに何日を以てするを定るを要すれば、今此兩人互に約書を作り何日を以て初めとすへきを定め其書を三葉に造り、一葉をプリンスゴルチャコフえ差出し置くは可然と、昨日スツレモウーホフ氏と談したりと云。然らば草案を起して見せられよと約して、別日午後四字過右草案を造りて送り越さる。中村、山内訳す。写し訳とも別に在り。

○今夜七字、米公使之招に応して晩食を其家へ取る。英大使、秘公使「」甲比丹「」同妻ともあり。家内壯麗。家族は細君と十五六前後之娘二人也。○十一字半帰寓。

○昨夜落手之状に添たる新聞紙類落手。

九日 木 廿八日

午前九字半バトロスキー来る如例。

○十一字、バルガマスカと号する写真師え往く。カビ子ツトの半身ヴィジッティングの半身像を造らしむ。五日可成といふ。まづは十二を造らしむ。大は十五ルーブル、小は七ルーフル也。但し此跡同形ならは十小五といふ。

○一字過外務省へ至りスツレモウーホフに面会。昨日秘書公使と議せし別約書之事を談す。同氏も則其義可然といふ。試に草案を示す。一二改正之文字あり。近く可呈を約して帰り草案は写し取、書を附して秘公使に返し同意を告げ、且明朝十字可面晤之便否を問ふ。

○渡邊之書を落手す。魯政府支那と交易之事、樺太開拓之事に付て此節大に注意する所ありて、技術家を送り炭山を開き支那日本へ貿易を盛にすへしとて、七千五百封度之元金を附してまづ此事を初んとす。

間に Buttolfo 氏之企画によれりと云々之新聞切紙在中。且曰去月二十日沈没せしニール船には、埃国博覧会にて取集たる歐洲各国之諸器械物品其他新古博覧之ため取集めたるものとも、凡て百九十一箱を失ひたり。然も幸にして日本人之命は此ためには失せざりしと云。愁中可賀之一事也。去れとも、佐野氏之丹精水泡に帰せしは可惜とも云計りなし。願くは少しにても取得度もの也。

○午後二時過、アン子シニコフ老夫人之許に至る。○馬車雇賃一月二百ルーブルを以て談決す。

○三日前、書生月給はまづ月百ルーブルと決せり。

○晩食前沓成りて試む、可也。

○晩食中ゴシケウイチ氏来る。伴てポツセツト氏を訪ふ。茶を喫し、同氏か少年以来経歴するに従て成る所之アルボムを見、其他雑談数刻、又歸るに臨て救助船会社之企望模範十余枚之図式雛形となりたるを見る。

アルボムはポツセツトか伝とも云へく、救助船式企望模範は五年前より之企にて二年前より起業せり。既に拾余艘あるのみと。然も明年は「」一艘を造り、終に百余に及ふ積り所凡五千ルーブルの造作費用也といふ也。英は五十年前より之を行ひ、当今既に式百余艘を置くといふ。其航海の盛なる以て見るに足る。

十二時歸寓す。

妻君か、知恵箱知恵の環などを出して困らせられたるは、御馳走中之窮件也。

○夜八字頃秘書公使書を來せし由。帰後披見すれば、明朝十字は延へて午後一字に來りくれよとの事也。諾せる旨認て明朝送る事とす。

○十日 金 廿九日

○朝秘公使へ昨夜認たる書を送る。

○バトロスキー来る如例。

○本野の書を得たり。英公使館藏書目録を越す中に、過日尋遣せしマコークリートレードは別紙に知るへしと書て別冊なし。近日中に見る事あらん歟を尋。○十二日落手す。

○午後一時秘公使へ山内を伴て至り、プロトコール^(ママ)にを校合異同なきを見認て手記名調印之三通を造り、一通は自ら持帰り、一通は彼手に

取置、一通は魯政府に送る事に約し彼公使へ托して帰る。

○二時行四時前まで川に沿て車行す。ベコトル堡を廻りて帰る。

○仏大使へ謁を乞ふ之書を送る。バトロスキー起草浄写、予記名する也。其外は続て送る筈也。

○タイムス新聞二日三日四日之分、今日一時に来る。今夜読て要所を適訳し置く。

○魯政府昨年布告せし徴兵令を、志賀と古川に少し読ましめて聞く。後日を俟て明になるへし。

○土曜日之夜半イサコースキーソボルに詣するには、券も入らず唯礼服して往て其よしを答れば可也といふ。

記したる時一時二十分後也。

○十一日 土 三十日

○バトロスキー来る。

○家を見に行く(以下空白)

○礼帽子成る筈之印悪し。仕直しに遣る。

○半礼帽も成る。不合に付同じく直しに遣る。

○夜十一時より、イサコースキーソボルに基督を十字架より下する祭式あるを見る。男女老若尊卑となく来り集りて、式に与かるもの数千人。宦人は衣冠を光らし、少女は新衣を穿つなど頻る可^観見ものあり。中に最奇なるは、数千之詣人皆手に蠟燭を照らし額胸に十字を画して不止と高く掲けたる数千之燭に道火を以て、一時に火を伝ると基督十字架したる形に十字を持ちて内陣に入る行列に、カルジナルは珠玉之

冠^冠を頂き錦之旗を掲け五彩之灯を捧けたるなど也。余は各国公使館之人々と共に、為に設けたる席に付きたり。宗旨之違ふ人々故、敬意もなきと見え談笑相続て数千人のもの、目をつける計り也。同教中猶如此之節、欧洲各政府ボープと不相着など又同教中異端之故に由れり。可考事也。○二時頃帰る。帰路王宮前ニコライ親王宮前などを過る。灯火昼よりも明に焰烟天を突く。其他諸寺観は云におよはす、大家之礼拝所など大同小異凡て此趣也といふ。

○此日バタロ氏の読たる「」某の中亜細亜紀行は、志賀氏に読せ聞く事怠るへからず。

○仏大使昨日之返書として、明後月曜日我公使館之人を其宅に見るへしと云越さる。添るに、明日之祭日期を遅らせしむるを断り来る。

○十二日 日 三十一日

頭重くおほえて朝十一時まで寝る。午飯後ドロシケに乗り、風雪を侵して王宮辺川岸など廻り、プーチャチン「ポシエト」アン子ンコウ同老婦諸氏を訪ひ、武部助某へも名帖を投して帰れり。外務卿輔亜細亜寮頭等へは人して名帖を送らしめたり。御者祝酒に酔て馬車を借に時之遅々せん事をおそれて行さりし也。

○佐野又書を来し、山内之来日を望む。

○本野か去十日落手之書に添て送りと見えマコーリーリートレード一件書類一冊龍動より来る。

○コントプーチャチン招請書を来し来る。火曜日晚六時、館内一同来るを望まる。

○老婦人アン子ンコフ氏を訪ひし節、ガラフ「」氏細君其兄とも
の友達か、四日晚八字より食して躍るへかれは来りて見るへしと招か
る。諾して帰る。

昨夜イサコースキーソボルには米公使夫妻と兎二人と秘魯公使と塊大
使館之アフタセー三人と仏の同コロ子ルガイヤルと瑞典の「」等
なり。式部助「」是に在て周旋す。

○賜謁之記

△拾号公信①印別紙

〔註〕以下、『大日本外交文書』第七卷、四九八―五〇〇頁に収録さ
れているため割愛した。

十三日 月 四月一日

好晴。到彼得城以来初見此好晴。

○バトロースキー来る如例。

○李大使に乞謁之書を送る。暫時にして答あり。明午十二時より二時
までの間、何時にてもよしと云。且儀容を用る勿れといふ。

○午後一時仏大使へ往謁す。白髪短く肉薄き老人。容貌不重は仏人の
真面目也。

○乗車ヲーステンサケン、ウェルツキー両氏に名帖を投して当日を賀
し、祭り市を徘徊して動物見せを見る中に支那人の女に伴ひたるか手
裏剣を能く打つあり。可驚見事也。蛇遣ひ象使ひなど大同小異。

○路傍酔客多し。

○プーチャチン氏へ、二日晚餐之供を飲て可受を答ふ。

十四日 火 二日

好晴如昨。

○バトロースキー来る如例。

○十二時半発寓。中村以下四人を同伴し、独逸大使プリンスロイスを
訪ふ。談話頃刻。

○五時半過發寓。プーチャチン氏之晚餐之招に趣く。中村初五人同伴
也。オーステンサケン氏、プーチャチン氏之子女合五人、別に一女客
あり。主人夫妻と予等と総て十四人也。○家法嚴肅、子女皆温順閑雅
之風あり。男子兩人は皆武官也。

○此日英大使に面謁を乞ふ之書を送る。答を得たり。曰、来る十六日
即四日午後一時略儀面会すへしと也。

○午後歩行。雑店を見て行く路に秘魯公使を訪ふ。不在。

○仏大使訪わる。雑話暫時、無他事。

十五日 水 三日

好晴如昨。

○朝、寓たるへく覚ゆる家両三を見る。○当地より華盛頓に送る書信
凡十五日を費すといふ。○スツ「」氏中細に在て収賂之風説あり。
但し其国人のため之舉動多かりしといふ

〔欄外注記〕
○魯之国法に於て、クーリーは其人自由たるへきのみならず、其船も
没収すると覚ゆといふ。

○ウラン氏来る。伴に午餐す。

○午後太子大傅ケ子ラールジノウエフを訪ふ。不在。名帖を残して、

帰路ケ子ラルクシーメロフの家を過く。エレナワシリウイチビュツ
オフを訪ふ。暫時面話。

○バロンローゼン氏外務省書記也を訪ふ。不在。名帖を置いて去る。

○イリヤアレキサントロウイチゼレヲノイ氏を訪ふ。来客多く共に茶
を喫す。妹氏類頻る美人にて、周旋配意又尋常少婦之及さるものあり。

○バロンシテীগリツを訪ふ。不在也。此人は父はバンカルにて類
る金穴也。当今大蔵之官員にて又金融之事を司る人也。其家之富之た
めに、各国公使大使などを初貴賤皆相交る人なり。訪問可然とウラン
氏の勧めによりて行く也。

○カルカルロウイチシデンス子ル氏を訪ふ。老夫婦と少女とあり。兄
なる子はソーボル船に乗り、将として支那日本海に在る也。其他兩三
家を訪ひ、尚寓居たるへくおほゆる家三家を見て帰る。

○晩食後、九時半よりセルゲーセルメテッフ氏之茶会に赴く。二字帰
寓。

「欄外註記」十六日なり

○十六日 木 四日

朝米公使館に行きシカイル氏に面す(余十五日之条に記せり可見。
満人「」来る。寓所可然覚ゆるものあり。近日見るに便ならしむ
る様なすへしと知らず。

○午後十二時半發寓。英大使ロフスト氏を見る。談話数十秒。内地旅
行論尋常經濟論ありて、今日之外務省論を非難す。予少しく抵抗して
後雑話数件にして終る。

○李書記官バロンアルヴェンスレーベン氏来らる。雑話暫時にして帰
る。

○三字より夏公園およびプロスペル街辺を車行す。

○育兒院の幼女ともを宮内之式車二拾輛に乗せ、或は四馬或は六馬に
して列を敬歩せしむるを見る。

○晩飯後アンニнкаフ老婦同居ガラフ「」氏之家に茶会踏舞之催
あり、行加わる。一二曲に列る。可笑事ながら又務也。プリンス若ゴ
ルチャコフ瑞西より帰省中にて同席益話あり。別に記すへし。二時帰

寓。○踏舞は音曲調に叶へるは云までもなく、大勢立舞ふ間に周旋進
退節序ありて一々混乱を見ざるに、小兒は十才以上十七八才中には
三十前後之ものも交り、後は四十前後之ものも又加れり。○小写真像
壺をアンニンコフ氏に送る。

○今朝山内を秘公使に遣り、過日外務卿えプロトコール差出せる往復
を写し越さん事を望しむ。午後復翰写に添書して送し来しぬ。往翰な
き故、明日往て取来るへき積り也。

○午後、秘公使其書記官新に到れるラヴァル氏を引て来る。同姓也。
十七日 金 五日

朝バタロスキー来る如例。

○秘公使昨日来せし書中尚其外務大輔へ之送翰を欠けり。今朝山口を
遣りて促す。午後送り来す。

○午後二時土耳其大使へ趨謁す。キャミルパツシャといふ温順にして
仏語をよくす四十有余の人也。館之設備最壮大也。

○帰路プリンス^幼コルチャコフを訪ふ。不在に付不面して帰る。

○志賀「」「」え行き、明日ワシイメル親王へ謁見之宮門等之都合を問合す。

○プリンスガリーツ^幼イン来らる。スツルーウェ氏え其妻之母君より送る之書を携来らる。共に茶を喫す。五時帰らる。○ジャパメールウエーキリを借す。

○新聞紙を日本より得たり。ガゼットのメールソムマリー簡にして尽せり、最よし。

○金次郎書を来し、十日新に約をなし前約をい両氏中に預り置、更に老年半を期して修業之議を決す。ワットソン為に与り力ありと云ひ来す。

○今夜郷信を認む。右金次の書をも父君へ呈す。○小写真を一は祖母様へ、一は徳田祖母様へ可呈送る。

○田邊へ書を送り、ウエルに書を達せし事とコムミニケーションを密にする事を云送る。

○右大臣公に写真をコルチャ氏に渡せし事を申上る。

○本所三公へ書を奉る。香川、小原、津田、好本、井上、深井等へ書を送り、塩田、谷田へも伝言し墓之事も申送り注意を乞ひ置く。

○明日コンスタンチンニコライウイチ親王、明午後ワシイメル親王謁後統て可賜よし式部頭より告来る。何れも冬宮中也。

○今晚よりワジイメル・イワノウイチバプステイン氏来りて魯語を教ゆ。内藤、寺見共にす。

十八日 土 六日

朝バタロスキー来る如例。

○官報之公信および私信とも今朝封発す。○山口より云来りし立花一条も現情帰郷之事を申送る。午後一時冬宮「」門より登りクジイメル親王に謁し、終て大野宮に登りコンスタンチン親王に謁す。コンスタンチン親王は、海軍総督や宮中海軍諸器雛形其他遠方之珍品を列したるメジュームあり。親王は英語もよく遊され、極て活発にして愉快之方なり。

○帰路其大傳に就て謁を謝す。

○四時よりセレメチーフ氏に行く。児女寄合舞踏会や、大人も雜り躍る。プリンス^幼ゴルチャコウ氏も在り。○アンニンコー氏へも立よりたり。○三時過にはプタシユスキー来りて、明晩ホテル「」に其姉妹と母との在るに、来り逢わん事を乞ふ。志賀と共に行くを約す。

○夜バクステイン来る。語学如例。

○楽工某券を送りて券^券願を乞ふ。

○十九日 日 七日

朝バタ氏来る如例。

○家見に行く。一は極て盛美之家にて一年老万ルーブルといふ。過美故不取。

○七時^{コルフェウ}プタシンスキー^{艦乗組士官之義也}の老母および姉妹を「」ホテルに見、喫茶談話す。プタシンスキーは現に陸軍建築課を修業中の生徒也。其兄は海軍士官にて現今日本海に在り。同席の海軍生徒にてベル、ケル氏兄

弟二人なり。

○十字頃よりポシエト氏を訪ふ。プリンス「」税関長官「」及び立花氏在り喫茶中也。同席して、十二時半迄話して帰る。奇事なし。

○金次郎より書を得たり。家大人より一月廿八日附を以て同人被遣たる、まつ可帰との書翰を封入したり。

○今日、本野か近況報知之書を落手す。又甚た可記の事なし。

○二十日 月 八日

バタロスキー来如例。

午後三時頃大使へ趨謁。帰路秘公使を訪ふ。不在。其書記官之近く本国より来れるあり。名帖を残して帰る。衣を替てガリーツイン氏を訪ふ。車見に行へき約ありし故なれとも今日は遅き故、明後日十一時を約して帰る。

○子バ河水融解、氷塊水上に浮動し威風殊更に寒を覚しむ。

○バグステーン氏来如例。

〔欄外〕（子ヴァ河開）

○廿一日 火 九日

バト氏来如例。

○十二時四分、三アレキサントル皇太子并に其女御夫人に趨謁す。帰路其大傳「」等に名帖を投し帰て、旅宿所見繕ひとして満人「」中村も同断、ニコライスキーモスト畔に行く。家類^類る美也。甚大にならず、まつ相当歟と見ゆ。代価難知を以てまつ不定。

○夜バクステーン来る如例。

○二十二箱の荷物到着せるよし運上所より報知あり。志賀、外務省へ行き其受取方を懸合ふ。明日中ならては難成よし也。明後日受取六箱の分は、直に冬宮アレキシ親王御殿へ可送積りにて、其都合をポシエト氏まで可為掛合ため志賀を遣る。同氏帰館して曰、明後冬宮に達し翌日開筵、又翌日賜謁となるは最妙なるへきに付き、其都合を計るへしとの事なるよし。但しアレキシ親王明日は態狼狩に出行なるとの事也。

二十二日 水 十日

朝カリツチン氏に行き、伴て「」家に馬車を見る。四坐開閉四輪之車を見て、千四五百ルーフルを以て買取故を談せんとす。明朝主人来寓之筈なり。

○午後、米公使公館へ行きスカイラル氏を訪ふ。不在。偶公使ジョイレル氏あり。マリヤルズ書類を借す。談話頃刻。時に米国コ子チカタルトホルトの人にて小銃製造器械を作る「」と云人来る。此人曾て李政府のために大器械三坐を造れるよし。今尚、他歐洲政府に注文を乞わんとて来り。此国にも軍務省中に知己を求めて居る也と云。其旅宿アングロテールに行て、其製作品の見本を見る。精行無疑いゆれと、差向我用に供すへき目的もなければ見ていぬ。

○朝ガタロスキー○晩バクステーン氏来如例。○朝ゼレヲノイ氏来る。明日発してウルテムベルグのストフトカルドに親王に供奉するよし。暇乞に来れる也。

○シヒレコッフ氏に根治治療を乞ひ、今日より薬用を初む。

二十三日 木 十一日

○朝バタ氏来る如例。○車やも来る。千四百五十までならては引かたしと云。依て明日を期して帰す。明朝志賀氏を遣り、四百までに談し決せずは、ガリツチン氏と談して兎も角もすへき積り也。

○午後メリコッフ氏来る。

○午飯前より志賀氏は税関に行く。行きかけゼレノイ氏を見立、外務省にて使部を伴ひ行て二十二箱を持来る。内六箱は直に冬宮へ持行く。明日開く事と明後日賜謁之事はポシエト氏と談せり。

○午後仏大使に行面し、李書記バロンアルベンスレーベン氏に逢んとす。不在。名刺を残して去て、米公使館に夫人及び姉妹之娘を見る。但し今日其対客日なれはなり。

○夜バクステイン来如例。

○十字後車を駆て塙大使に行き謁す。門前瓦斯星形の灯火を照し幕を張り馬車群をなし、家内は式部官員ありて上下之周旋面会之引合等を司る。茶菓酒等を備えて遺勞に供す。来客数百、十字後を以て初め、予等帰る十二字なれとも尚入来るもの出て行く人と等しく、堂上所として人ならざるはなき程也。虚礼実に可笑か如しと雖も、朝に友となり夕に敵となるの国からにて、友たる時重臣を接するの礼又重臣の其国民等と交るの体まつ如此。煩礼曲節もありて、其厚遇を示し感荷を欲す事もあるものあるへし。

セルマン英土大使、米秘公使書記官、米ゼネラル某コンシリエなり。

セルマン書記アルヴエンスレーベン氏にも逢ふ。其他数名不委記。

廿四日 金 十二日

○朝医師チゴリコッフ氏え行く。

○バタ氏来る如例。

新聞紙ガゼットのメールソムマレーをウラン氏に為見置。ラステンサケン氏へもエコージュシャパンを見せ置。

○車やに志賀氏を遣り、一千四百ルーブルを定む。

○明日アレキシ親王賜謁へき筈之処、御故障あるよしにて明後日との事伝言来る。

○志賀も伴ひ中村および満人「」氏も共に、ニコライスキーモンストの「」の家に至り再び見る。図を借り来る。

途にペートルパウロスキーキーレーボスチヤおよびチエルコフ、并にペートル帝曾て住給ひし家なりとて、礼拝堂の如く今はなりたる小家を見る。小艇、椅子、地図、其外帝手製之もの数々納めあり。

二十五日 土 十三日

○朝バタ氏来如例。

二十六日 日 十四日

朝バタ氏来如例。

午後プーチャチン氏へ行く。同氏近日より在所へ行くよし報知ありし故、告別旁行し也。「」ナーベルジニーにある「」氏の家を勧めらる。行見る。費索也。故に昨日図を借りし家を熟読せん^{ママ}と志賀子と行く。然るに半分に七千、悉皆にては尅万ルーブル也といふ故

其俣にして肯ぬ。

今朝家之事と家僕之事を談すへきため、志賀をカリプチン氏の家に送る。家もまたるへしとの事にて、約定せは合議すへきを頼み置し也。

○帰路又別の家を一「ブルヴァールにて見る。家具なく大さも充分に見えぬ故まつ見合置。

○夜シデンシルの両親方へ逢ふ。茶話半夜に及て帰る。

二十七日 月 十五日

朝バタ氏来如例。満人「氏又来る。昨日之家之事を話して一笑したるに半を六千別半を月百二十計にて現に借せあり。主人はそれを増ん事を望む也よし。然れは今一応談して半のみを六千歟又は五百増し位にて取るは如何と議せし上一応掛合見る事に定めぬ。

○午後年々博覧画場に行く。

○夜曲馬会へ趣く。

二十八日 火 十六日

朝バタ氏来如例。

○午後十二時発寓。まつポシエト氏を訪ひ、一時アレキシ親王に謁す。椅子へ被進よし御口上申述席上に列ね厚謝御答あり。昨年 of 更に記憶に上り来る厚賜、常に此記憶を保持する之僕なるへし等之説話終りて、別室に於て諸書記官賜謁各々御談話あり。少壮剛氣満面。

○二月三日付公信落手。榎本公使十日に英船より発せらるへき旨申来る。

○バタ氏来如例。

○二十九日 水 十七日

バタ氏来如例。

志賀氏ガリツチン氏へ行き馬之事家の事など談し、午後「氏と共にニコライ橋の家に往見るを約す。

○午後、一同アトミラルポシエトバロンシーリングえ名帖を投す。昨日之謁見を謝する也。

○「氏と中村、志賀とニコライ橋之家に行談す。事甚可ならずとの評にて未決。尚他家をも見聞すへしとの異見なり。但し、此家も可明渡得月日を確報し来るへき筈也。

○今日皇帝誕辰に付、市街海陸軍に属する諸署等花灯彩旗掩空。午後一字百一之祝発あり。彩旗花灯は諸船最美なり。帝宮は何之飾も見す。

○昨夜落手之公信に属せる新聞紙類残余之分落手。

○三十日 木 十八日

バタ氏来如例。十一時より「宮に至り」野に陸軍之レヴィウあるを傍観す。歩騎砲合て凡式満五千。皇帝親臨諸列を巡覧、終て

軍服を着るへき人には背引なりたるに付

諸軍各隊各々其装を異し、近衛騎馬隊は最美にして又各隊装を異にせり。尋常輕騎重騎之外コサツクの騎兵最別種々行装合四千騎。重騎は尚黄銅或は鋼鉄之重鎧を被れり。大砲は六斤九斤及びミトレリチョースと併て六十四門。

○夜舞踏を「劇場に観る。巧も精も又甚た他歐洲各国と異なるを見す。

五月一日 金 十九日

朝バタ来如例。

○十二字、プリンスコルチャコフ氏之発足を祝し、名帖を投して帰る。蓋し、多事面会を厭ふよしなれは也。

○午後、字書記官バロンアルペンズレベン氏を訪ひ面し書記官「」氏にも面す。

字大使は今朝より帰国のよし。是は今晚より当皇帝ベルリンへ発車なるによりて也。

皇帝同行は「以下空白」

英大使は明日より帰国のよし。是も皇帝続て英行の故による也。

○二日 土 廿日

朝ハタ来如例。

午後家見に行く。

夜曲馬を見る。女之体操可驚巧に壮快なるを見る。○鹿狩最壮快なり。

○三日 日 二十一日

朝バタ如例。○ラーステンサケン氏来訪。

○午後、花を海軍局中の博覧庭に見、去て「」にメリニコフ氏を訪ふ。在らず名帖を投し、是より前○皇宮河岸に家を見る。美且高価なり不決。

○葡公使館に公使および細君を見る。此人文学之人にして著書もあり。古書など多く貯えたり。尋常政治家者流と異なり、家室も頗る質素なり。家租も年に式千五百ルーフルを払ふといふ。

○夜ポシエト氏を訪ふ。

○四日 月 二十二日

朝バタ氏来る。又ダリンスキも来る。家の事を又談す。別に五間ありと云。午後志賀と共にシヤチラン氏を訪ふ。同氏明日英国へ発する也。水谷の借りし金を本野へ返す分二十封度^{依金百ラッ}を、松田の八月よりの学校費二十封度とも併せて同氏に托するを依頼す。

○亜細寮へいたりウェルツキーに面し、ハタ氏給金直渡しにせし事を告げ、同氏の勤に満足せし事をも告げ

○明後日ウェストマン氏え式礼勤する事、同氏妻君に逢ふ事をスツレモ氏に尋ぬ。明後日対客日なれは可燃と也。スツレモ氏の妻君も可逢を乞ふ。近々晩食すへければとの節可引合と也。○書類取置方帳面製し方等を見る。古来の書類は皆宮中に別に大書庫ありて藏めたるよし。十年以来之ものを此所にて藏するといふ。然も又間に百年以来之ものあるを見る。

○夜ラーステンサケン氏を訪ふ。妹とウェルツキー氏とあり。フィンランドの土質、中亜細亜の地理等面白き話しにて夜ふけて帰る。

○五日

ハタ氏来如例。

○米シカイラル氏へ行きチフラチリを托し、本野え当水谷之分返却と松田へ廻す分を弁解し置たり。松田へも別に書を付えたり。○シカイラル氏備鈕式箱と黒銅鈕壺組とを送る。○午後アンニンコフ氏を訪ふ。其子の名付の年回なりと聞し故、土産之品携え行けり。今夜茶会催す

として、晚バク氏の稽古半にしてアンニコフ氏の茶会に催く。ピュツラフ夫人、ウランガリーもあり。外に親懇之人々七九輩。骨牌将基弾琴喫烟茶等おの／＼おもひ／＼の遊びなり。

○六日

朝バタ氏来如例。○「」来る。家見に行くおもわしからず。

○午後ウエストンマン氏を其役所に訪ふ。仏大使あり邂逅す。是より前塙大使を訪ふ。夫妻とも出かゝりなりとて面せず。手札を置いて帰りかけ秘公使をも訪ひしかとも、書記官とも不在なるよしに付、是又手札を残して帰れり。

夜マリンスキーテトルに演戲を見る。ジョンテレブル時代のアプリチニキの横行せる有様を作りたるものにて、武人の横虐之趣を示せり。其最なるもの

キケンヤージ「以下空白」

○七日

バタ来如例。

○ベベコユキー氏の家を見る。ダリンスキー同行。

○米公使および妻君を訪ふ。不在。名帖を残して帰る。

○夜サガレ探要仏文写本を山内に読しめ拔萃す。

○八日 金 二十六日

朝、モスコーステーションにプーチャチン氏之出立を送る。プーチャチン氏は其娘を伴て領地へ行く也。

○バタロスキ来如例。

○午後仏大使及び妻君を訪ふ。不在。名帖を残して帰る。

○ヲーステンサケン氏に志賀を送り、地理社集会に臨むの都合を聞く、不定也。橘孝齊の身分、当今之処此後之所とも聞糺し置度同氏に尋しに、同氏答て未決之事あるにより決定之上可為知と也。

○ウエルツキーより英クロブの切手を送り来る。

○九日 土 二十七日

朝バタ如例。

ダリンスキー来る。ベベコフ氏之代人も来る。約定草案英文とも成る。ベベコフ氏代人は午後四字に来る。手附五百ルーブルを渡すへき所、

忝間にプリンス「」氏の荷物を入れたる間之事に付論不合。其上、間数等不極りに見余論ある趣故、明後日を期して別れ論不定。

○午後五字半「」橋に一家を見る。か也よし壮飾未成也。

○五字半過、英クロブに晩食す。ウエルツキー氏導引也。

○バク氏来如例。

○プタシンスキー老母姉妹とをホテルデラフエに訪ひ、半夜後帰る。

○今日リン子ン類夜具用手掛用等凡て求めたり。バタロスキ導引す。

備凡「」百ルーブル也。

○十日 日 廿八日 雨降る

朝バタ氏来如例。

○午後ウエストマン氏を訪ひ、細君および三人の娘を見る。喫茶雑話数刻。主人帰来共に話す数秒。

○ワンスキー島に天津総領事スコッチコフ氏を見る。二十余年支那

に在り、よく其語に通し事情にも通せる人也。予、先年彼地に至りし時邂逅せし人にて、過日来訪ありしに報ゆる也。

○十一日 月 廿九日 雨降る

朝バタ氏来る。家之事を談す。ダリン氏も来り。同しく談して同氏に委任しベビコフ氏に往しむ。明朝来報すへき筈也。五百ルーブルをも同氏に附す。

○ペシニ「」氏来訪。榎本とポイントガールよりアレキサンドリヤまで同船せりとて種々話あり。

○「」氏来訪。式部の出仕にて「」といふ官也。過日英クロブに交友となりしによりて来訪せる也。

○十二日 火 三十日

今日ビッコフ氏へ家之事終に決す。寝具其他家具類買入方奔走。

十三日 水 五月一日

バタ氏来如例。午後エカテリンゴフに車を馳す。車馬群をなし貴賤交至る。皇后の御車も見えたり。諸国大使公使等をも見たり。

○帰路「」遠に舞踏奏楽を見る。士女群集、必竟淫楽の地と見ゆ。

十四日 木 二日

朝ウラン氏に逢ひ、近日田舎に至り又転して日耳曼に至るへきよし話あり。○午後転宿ビッコフ氏の家にドヴァルツケヴティナベルジナ(皇宮畔)に移る。家子ヴァに臨みペートルパウロスキークレーポスチャ(ペートル城、即ペートル自ら築ける城也)に対し皇宮及び大理石殿に併ひ夏園に遠からず。外務省に接し最便且浄潔之地也。価は家具を備

え火蔵を給して、一年八千九百ルーブル也。

○十五日 金 三日

朝バタ来ドリン来り。買物等記してさす。晚エトリン(カピテン)氏の招に応し、志賀を伴ひ行く。細君は米人にて、過日米公使館に面会せる也。エトリン氏今造船(私社)の主宰にして、三四千の人員を支配し其職を治むと云。帰路同氏と共に又「」園に至る。暫時にして去り、ビュツオフ氏細君を訪ふ。但しセレメチフ氏を訪ひしに不在故、転してビュツ氏え行し也。

○十六日 土 四日

ドリンスチーの誘引によりチレクトルは「」氏也○ペートル城内に在る造幣寮鑄貨場を見、記念錢のコレクションを見、其一二を価求し。別にペートルの小舟諸州より採取し旌旗を見。

○「」号公信を外務省え差立る。○晩飯は英クロブに取る。ウェルツキーも来り。其他、諸知音を見る多し。○夜セレメチフ氏に往く。細物を児輩に送る。○英クロブの帰路ペリユ公使に至る。其近日発して帰国するよし故、見立に行し也。写真取替せを約す。○マリヤルーズ一件書類取替せも、日本秘魯両国直になすべし。故は公使十月より遅りて来るへけれ其方よかるべしと談せし也。

○十七日 日 五日

朝バタ来如例。ドリン又来る。衣裳図来る。○僕従之制服を定めんと也。然も未だ心中に定めかぬ事ありて明後日を期して別る。

○午後セレメチフ氏来る。長談裁判事件におよふ。蓋し、同氏ヲケンブルジョスチフラクピースの壺人たるによりて、其関係の趣を尋ね延て売奴廃業の節之改革の有様、地面の配当地主の報酬等を聞く。別に「」号に記す。

○ペリウ公使に写真壺枚及び東京へ原色六枚を送る。

○晩食後、米公使を訪ふて扇立を其細君及び兒女に送る。

○ペリユ公使も在り、共に談話傾刻。○夜ポシエト氏を訪ふ。来客多し。男女併て拾余人。

○十八日 月 六日

朝バタ来如例○其前夏園に遊歩す。草色枝芽之趣、我早春に似て風力尚強し。

○仏金の為替にしたるを受取。

○榎本公使へ書を送る。伯林へ向けたり。

○官金も四千余受取たり。

○今夜バタ氏に六十ルーブルを遣す。

○今午後ブーチャン氏に行く。細君に面す。本月末英に発すへしと也。○領地に尼僧を送り病院を建るなどの話あり。又児輩の検査の後見するなとにつき親切極るを覚るものあり。

○又榎本へ一書を送る。是は明日付にて明日差立る也。

○十九日 火 七日

午後キニヤージガリツチン来らる。明後日アンユコワの晩餐に招かる、を告らる。其他無異事。

○二十日 水 八日

Baron von Rosen 氏に会す。今晩伴に地理社の集会へ赴くを約す。○地理社は、魯国地理及接近諸邦之地理人情を講究実検し、明細図説を造るを本務とす。今晩過半年の会計を通知し、新成之明細図を示し其業を助けんため、金二千ルーブルを出したる「」氏の書翰を読み、「」氏の近頃印度に旅行せる日記の抜萃を自ら読むなど奇とすべく妙な事もあり。会場の結構淡にして喋あり。後日別に記すへし。○他如例。

○二十一日 木 九日

今夜アンユコワ氏に晩食に会す。Baron von Rosen「」氏もあり。其他親類多く集る。骨牌将基等如例。帰路、夏園に究民救助之ため皇后其他高貴方々の催しにて富講を催さる。京物、牛馬々車、金銀器を初として美にして壮なるもの多し。旌旗灯火之美可見ものあり。費す所「」金、得る所の金凡「」残て救貧の用へ充るもの凡「」金といふ。

○此夕予も三五ルーブルを費し多数の札を買ひたり。一も所得なし。唯施しを究民になせしのみ。○他如例。

○二十二日 金 十日

午後市街遊行。写真挿及び絵及紙の類少々を買ふ。皆凡物也。

○ロマニヤ代理「」氏を訪ひ報訪する也「以下空白」

○ゼルマン代理公使アルペンスレーベン氏を訪ひ、新来書記官ウエルテンスレーベン氏をも訪ふ。皆不在。名帖を投して帰る。

二十三日 土 十一日

○朝ウランカリー氏を訪ひ

○午後解体博覧所に行き、地理社副長「」氏を訪ひ、床板製造所モサイク細工所をも訪ふ。精巧可見ものあり。皆ウアンリスキー島にあり。

○晩英クロブに食を取りウエルツキー(ミルレル(木綿製造所長及びスウェデン公使等あり。

○今夜、榎本公使ベルリンより電信を送らるゝに曰、閑あらは来るへしと。依て其都合を談す。中村も来る。

二十四日 日 十二日

午後買ものに行く。日曜日にて多く不調。「」氏、「」氏を訪ふて帰る。○晩バクステインを招き共に食す。

○朝ヲステンサケン氏に行き、明後日よりベルリンへ発すへきを相談す。

二十五日 月 十三日

○革製刺力手袋等買ものへ行き○中村氏自分留守中、公使館中の公事可取扱旨ウエスマン氏え報知之書を送り○伴て同氏に面し、又ウエルツキーにもスツレモウーホフにも逢ふて其よしを述ぶ。

○米公使にも行て、急に伯林へ赴くを告ぐ。晩、同使来り添書を伯林之米公使へ来し、又送書を托せらる。

○ウランガリー氏にも逢ふて暇を告ぐ。同氏も来りて暇を告げ、名帖挟を送らる。モスコの細工也。写真を交替す。

○外務省へ書を送りてパスポートを乞ふ。晩、ウエルツキー氏持参せらる(共に晩食)。蓋、今朝スツレモ氏に面せしに、此事要用なる旨心添ありて其送り方をウエルツキー氏に托せられたるによる也。食後伴て「」ツヴァルに至る。千店万品在らざるなし。最粗造なるもの多し。尚漫に車行して帰る。

二十六日 火 十四日

朝七字出宅。八字出車。

昨日(仏金千四百即七十枚ナポレオン也

魯指幣之八十七ルーブル也

メ魯指幣之割にして五百ルーブル別々請取置。

中村、志賀、内藤、バタロスキー車駅に來り送らる。

○昨日も比保堡は雪花霏々たりしに、今日汽車漸く南進するに及て草青く枝青きを見、又犢睡に鵝泳くを見るなど車窓眼を悦むしむるに足るものあり。

○二十七日 水 十五日

満山満野或は紅或は黄、所として花ならざるはなく、春色初て全きを見る。晩八字四十五分ベルリン着。不取敢ホテルヤンフンに宿る。

○品川を公使館に見伴て榎本氏不在。空しく帰て臥す。

○二十八日 木 十六日

今朝ホテルローマに転寓す。榎本、山本、市川を見る。山本は曾て陸軍少佐たりしか、遂てミリタリーアフタセータルへき積りにて、まつ来ると云。

○午後品川と共に米公使を訪ふ。添書送書とも達す。書記官へも名帖を残して帰る。○書記官は午後直に返礼に来れり。○今夜、松本、佐藤、榎本と同じくカフェ某に遊びビリヤルドを争ふ。生牛肉醬を食ふ。又麦酒を飲む。

二十九日 金 十七日

今朝バレードを「」野に見る。皇帝皇后諸国大使等も皆出馬也。歩騎凡壺万七千計り。

午後魯大使を見る。蓋し昨日品川より書を送りて榎本氏及び予等之面会を乞ひしに今午後一時を以て答えありしによる也。帰後佐藤と伴ひ榎本に従ひ解体の博物館を見る。○晚北白川宮を訪ひ奉る。松本氏を伴ふ。此前本間来り話す。又伴て行けり。今夜榎本氏と夜半後對話。二字後に至て終る。

○三十日 土 十八日

午後北白川宮降臨。伴て武庫を見る。甚佳ならず。○晚榎本氏に従ひ本間も同行して「」レストウレントに海老を食ひ晩食す。帰路ビリヤルド室に遊び三人競争す。予は大に劣れり。榎と本とは僅に甲乙あるのみ。○午後秘魯公使を訪ふ。巴里に至れりとの事故不面。

○三十一日 日 十九日

午後車行、公使館に至り「」園に徘徊し白川王を訪ひ奉る。蓋し、松本、品川等共に和様の晩食を製し、榎本氏及び予等に饗せる也。蒲鉾、煎鳥、香之物など奇ん珍の料理なるに、中々に書生輩の手料理には勝れたるもの也。人に如此相和し相楽しみ親しく皇族と奉交するも

又海外交誼の一理益なれば、之かため悪習悪弊の生せる様閑易に慣れて随しきに陥らぬ様なと種々論する事ありて、尚齒徳共に尊き高官名族の友を得給えと奉勸置ぬ。帰路又「」園に廻り奏楽彩花火を見る。

六月一日 月 二十日

武庫を見る。新古大小之武器を集めたる大概各国都府に在るものとしけれども甚たよきものにあらず。殊更に記するに足らず。

二日

麦酒製造所を十字架山に見る。

三日

魯大使館に至る。レユツユブ氏初め諸書記官に面す。大使今晚よりエミスに行べしとの事故、大使にも面して暇乞をなさんとす。不在故帰らんとする途に逢て暇乞を述ふ。

四日

新メジウムを見る。シャロットテンベルグを見る。

五日

「」を見る。熱帯地方の諸虫即大小之蛇類より、河海之諸魚を集め其余数百種之珊瑚虫類あり。

○重て米公使および書記官フィン氏に逢ふ。

六日 土 二十五日

朝八字之汽車に乗り品川、市川、山本を伴ひポットスダムに至る。サンスシー殿其他庭園宮殿可観ものあり。「」宮に皇帝之書斎寢殿

等を見る。簡易質朴可驚ものあり。予等之戸外に退出の時恰も皇帝之皇娘(バデンの妃)と同車帰り来給ふを見る。余等脱帽すれば手を帽に加えて礼を返さる。又厚しと云へし。新宮といふには「」にて当今皇太子之居也。壮大にして且美麗也。就中最可驚は鉾石海虫「」珊瑚を以て作れる壁也。五字の車にて帰る。

七日 日 二十六日

午後アルセンスタラッセ第四家に品川を訪ひ暇を告げ、又北白川宮に謁して別を告げ、酒井、松本、佐藤などにも各別を告げ帰りて、右諸氏と同じく喫飯し、十一字発車。

○アレキサンドロヴラ之税関之吏懇締り。

○八日 月 二十七日

午後二字ワルシヤワに着す。総裁コツユブ氏式部官吏某を出して接待せしめらる。ポースのコムマンドルセ子ラル某又同じく迎て接す。晩コツユブ氏を訪ひ面す。○夜「」園に遊び亭の諸席を不残見る。夏^夏日之景類^類の佳也。又前日雪中に見しものと同じからず。

○九日 火 二十八日

朝十字発車。式部某スムマントル某皆来て汽車駅に送る。

○十日 水 二十九日

晩七字ペトルブルグ到着。中村初迎て車駅へ来て、伴て公館に来る。

○十一日 木 三十日

朝市川と伴ひ亜細亜寮にスツレモウーホフに逢ひ、ウエストマン氏に公使面会之事を談す。明日別に書を送りて可決合に決して帰る。但し

予か帰府をも告げるためウエストマン氏にも逢ひたる故、尚同氏にも逢ひ、序に公使面会之事を聞しに明午後二字と定らる。

○然も書は公使より送て、其到着を報せらる。

○十二日 金 三十一日

予、公使と市川と同伴して、午後二字亜細亜寮にいたり、まつスツレモウーホフを訪ふに席に在らざる故、ウエストマン氏を見て後にスツレモ氏に逢ひ、同氏の紹介にてラステンサケン氏に逢ひ帰ける。

○晩米公使およびスカイラルを訪ふ。いつも不在。

○十三日 土 一日

ラステンサケン来り。公使を賀し、スツレモウーホフ氏も来らる。夕ウエストマンも見えたり。

○十四日 日 二日

志賀、亜細亜寮へ行、スツレモウーホフに我公使之各国公使へ請謁あらん事、謁帝前如何あるべきやを問合しむ。謁帝後式之相見あるへけれども、今に於て私謁相見あらされは同僚不相交の容あり。不可然か如し。相見るを宜しとすとの論也。故に其勸に従ひ「以下空白」

○十五日 月 三日

公使より日耳曼大使へ書を送り相見を乞わる。答書あり。期するに明日午後二時を以てす。

○晩、車に乗りて近島を見る。寒し。

○十六日 火 四日

午後セルマン大使に公使と同じく行く。市川従えり。

○帰路各大使公使之館を尋問す。多くは不在也。

○贈書乞謁。唯、日耳曼のみになせし故は其他之大使皆不在比持堡を以て也。

○十七日 水 五日

今夜志賀子と浴館へ行く。

○十八日 木 六日

医を招く。来らず。

○十九日 金 七日

医来り、治療法「」水薬を飲む。浴湯毎夕温度廿八度とす。

○二十日 土 八日

又医を招く。曰く水蛭を施すへしと。晩医生来り蛭をかけて去る。温浴を廃し平臥養性。

○今夜に來薬を替ゆ。乳牛和物油あり。

○二十一日 日 九日

不起。薬量を代えたり。別に膏薬を掀衝部へ施す。白色にして酸臭あるもの也。○今夜医来り前法を施して去れる也。

○二十二日 月 十日

○此日秘魯公使之ヘルリンより送るを落手す。書目の帝に差出すべきものを封入して、其れ手類の省略を乞ふ也。

二十三日 火 十一日

医来云。病勢大に摧けたり。但し下痢三日を見たるを以て苦塩水一瓶を飲む。甚た効なきか如し。

二十四日 水 十二日

秘公使へ送る返翰之訳成る。尚不可也に付改む。

○医来る。薬法を改む。袋油也。朝午夕三回二粒つゝを用ゆ。膏薬依然。○今朝自然通あり快を覚ふ。病勢又大に緩解せるを覚ふ。

二十五日 木 十三日

明日中村出發。任所之マルセルに赴くに付送別として写真およびアルバムを送る。

二十六日 金 十四日

中村發足。医来る。

○秘魯公使へ之返書をベルリンへ送る。

二十七日 土 十五日

晩新聞紙を読、樓上に雑談する事大概毎晩なり。別に不記。

二十八日 日 十六日

此晩改服。下樓晩飯を諸友と共にす。

二十九日 月 十七日

医来、温浴毎夕を要せず。用薬三日依然たれと云て帰る。激動を戒む。朝より着服。下樓事を諸君と共に取る。

三十日 火 十八日

今朝秘魯公使電信を龍同より来して答を促す。故に廿六日ヘルリンに送れるを云ひ、且其大意を電信にて報答す。

七月朔日 水 十九日

今日、寺見病あり。夜学へ来らず。

○郷信を得たり。森山之書時情を知るに足るものあり。蓋、廟議之動遙可驚もの多し。島津氏任左大臣。

二日 木 二十日

晚近街に散歩す。公使と伴ふ也。

○今午後医来り。明日より洗済を用へしと也。

三日 金 廿一日

写真を旧友親戚に送らんと裏書す。○書翰も数通認む。森山、中村、香川、今井孝行、父上。

洗済を買弁、今晚より初て用ゆ。

四日 土 廿二日

終日書を作る。数通別に記す写真多くを封入す。又別記あり。皆小野寺、増田へ附せんとて也。

五日 日 廿三日

秘魯公使、去一日龍同に書せる短ひ伺を送りて、其本国へさるよしと我書を握手せし由と我望み申書を伯林に在る代理公使より送り越すへさよしとを云ふ。

六日 月 廿四日

農業メシウムを見る。別に記載あり。

○朝益田か旅行単を作る。

七日 火 廿五日

医来診。明日より別に塗抹済を用ゆへし。前法兼用一週間たるへしと云。

八日 水 廿六日

紙幣寮に行く。印行之機関、鉄版之用法細大彫鏤之妙、銅錢カルハニプラスチリ作用等、奇に妙に其精可驚ものあり。別記を要す。

九日 木 廿七日

小野寺、増田等本国に発す。午後英書林に至る所買書名「以下空白」晚ウエルツキー來暫時談話。晩飯に忠耕メジムのプマフェスアル「」来り。共に飯し食後談話数刻。弟金の書を得たり。

○曾て岩公を刺んとせし武市以下九人、斬に処せられしは此日なりしを後日の信に得て、是に記入す。

十日 金 廿八日

マリヤルーズ一件之近來之書を本省へ送り、書類為替方之事を申送る。○土耳其事情を摘訳す。別記あり。

十一日 土 廿九日

ブルユセル會議之事に付、英人某之英政府の処分を議する文タイムスに乗せたるものを讀む。別記すへし。

十二日 日 卅日

今日皇帝ツアルスコイセローに還幸之筈と魯人相伝ふ。○午後ウエルツキーを伴ひ志賀、内藤と同じくペトルゴフに遊ぶ。○ペートルの古宮は質樸上世之様をおもふに足り。「」殿之壯麗これに増る。其飛閣之壯快に至ては、宇内比なしといふも又不虚。○当帝之小宮其佳麗又可愛。

十三日 月 七月一日

午後榎本氏ウェストマンに接して謁見を乞わる。○此日郷信を得、宮本近況を報し各公使の対話書を封入送致す。大に台湾一件之起伏無定所の故を解するを得たり。○渡邊え郷信の近況を云送る。

十四日 火 二日

国書草案および口上案を内見に送る。

○渡邊書を來しニウヨルク新聞の抜萃を送るに曰、日本船長門に至り一部は既に台湾に至れり。清政府甚た之を拒まず。且此費を償置といふ風説あり。未甚其果如何。

十五日 水 三

来る土曜日(魯曆六日)ザルススイセローに於て賜謁るへき旨申来る。榎本公使に市川従行之筈。○予昨日より微熱を覺、今日不起出医を招き藥を用ゆ。

○本省より電報あり。隱符也。過日之隱符に對る也。粗今日之決定を祈るを得たり。

十六日 木 四

發熱昨日に減せず。○志賀、ザルススイセローに行く「」のため也。

十七日 金 五

熱退くを覺ふ。未能起。○医薬法を転す。

十八日 土 六

謁見如式済む。明後日公使之コロシスタッドに同伴せんと御直話に約を得らる。

○病勢殆全去る。

十九日 日 七

謁見済之事、コロシスタッド行之事、および十五日電報落手之事をも電信にて本省へ報す。○志賀隨行之事其他「」の事之ためにザルススイセローに行く。

二十日 月 八

公使コロシスタッドに行かる。市川、志賀従ふ。ヴィチャスの世界を一周して帰來しを見るゝと大比特艦の將に成らんとするを見るゝとを以て今日之行あり。我公使も其行に加えられたり。蓋し我公使海軍之人なれば如此に於ては事に交際都合よき事あり。

二十一日 火 九日

昨日所見のペートルグレートは、尚尙年半を費す非されは成るまじと云。○皇帝コンスタンチン親王、其幼王兩君今日より「」艦に乗らるゝよしにて同行なりたりと云。長は十四幼十二と云。○帝親王の懇親、および兵と相親しきの様など皆別記あるへし。セルマン大使并に其軍事諸員數輩も同行なる也。

二十二日 水 十日

渡邊書を來し、台湾に小せり合のありて邦人の八人斃れたると、文部長官の人に害せられたるの新聞ありと伝ふ。副田も書を來せり。○浅井保徳書を來す。并に写真を送れり頗る美貌に見ゆ。

○榎本公使横浜の一友蘭人より書を得たり。五月六日の認にてタイワンの事、渡邊の告るに粗同じく人員は十一人といふ。○米の輸出を禁

したる趣此報中に見ゆ。外人皆甚た不平の様見ゆ。○台湾に我兵の上陸するは清政府更に拒まず。却てこれか助をなしく接待するとの趣は、渡邊の申越せるも此報も近來の報殆一齊なれば、今は少し心易くおもひせらる。柳原公使五月廿九日發足との事、渡氏内報を得たりと云。

二十三日 木 十一日

医來り診して洗済を与ふ。一七日試むへしと云。今晚を以て初む。大丸済の用る如前。

晩アレキサントロスキーサードに万里小路秀磨、二橋〔謙〕両少年と共に散歩す。

○今朝より中亞細亞史をバトロスキーに読しめ、公使と共に紀聞す。別に録す。

○英大使は來月三日頃までに歸來て会すへしと、秘公使への返書を來せり。

二十四日 金 十二日

記聞如昨。○午後公使は各国公使および諸省長官府軍士に廻勤あり。市川隨行す。

○余は米代理公使スカイニルを訪ふ。雑話傾刻。

○夜公使と兩人伴て浴に趣く。通語不如意可笑事多し。

二十五日 土 十三日

朝記聞如昨。○午後、志賀と銀工舗にいたり銀器を見、書肆に地図壺冊と式葉を買ひセバストポル戦記を買ふ。○氷汁および桑温水を喫し

去てビュツオフ細君を訪ふ。其今晚より北京へ發するを賀する也。児成長前日の見る所に比すれば殆他人の如し。我児も又如此なるへしとおもわる。○同氏は壺男子を季^{マキ}ひ、壺女と小児を以てシベリヤを経て陸行すへき企也。女児も又剛腸如此。欧人の旅に馴れたるとは云ひながら、抑又自ら特^{トク}む所あるにあらざれば能わさる也へし。

二十六日 日 十四日

○昨晚郷信來る。家信なし。定吉一件書類を蕃地所分に付布告書寫し廻來る。田邊より榎本への内書もある也。新聞なし。

新聞紙中、台湾に小せり合ありたる事をのせ、又今年のブゼットを乗せたり。

入 88, 811, 111.

出 61, 111, 111.

残 21, 111, 111.

と見ゆ。但し台湾入費を算せされは大差必らず生すへしと別人の論あり。

○二十七日 月 十五日

讀中亞細亞誌如例ならざるは、バト氏來らされは也。

午後カラス子ーセローに野営を遠見し、邨中を徘徊し宿陣および將宮之体を見終て競馬を見る。ニコライ親王催し主にて、諸隊の壮士騎馬の達者秘花の名馬を乗りて賭を競ふ也。

第一勝は、五千ルーブル金と五百ルーブル品也。三四に至るまで賞賜有る也。別に、コサック騎兵の達者拾五騎計りつ、并ひ馳て、其速を

競ふ。最妙古雅之武風可見ものあり。馬場は四ヴオルストなり。競馬中障りを置くものは檣あり、晷あり、壁あり以て行道を妨く其数多き拾壹箇に及へり。此競に勝るは「」にて其乗る所は「」の持馬名をビスマルクと云ふ。今日の最駿足也。其余スルタン、タイクンなど名付るものあり。欧洲物に名るの意多くは之を称するに取り間に又之を愛し之を親しみ或は敬するに取るものあり。我風儀と等しからざるものあり。今日の乗人に第一場の競を勝ちたるはウルテブルグ公子也。其馬は「」也。

七字汽車に乗て九字比持堡に帰り「」に晩飯し、十字半帰寓。

今日棧敷は皇帝之棧を中央にして左右に長榻あり。余等之行しは右榻第十区也。十と十一とは諸国公使及び書記官等之婦女も見ゆ。今日の所見、凡て陣中に在るか如く、其遊びも其性の武にかゝりたるのみならず、其人体より其式に至るまで、凡て陣中之遊戯を想像する計り也。

○二十八日 火 十六日

読中亜細亞誌如例。○書を宮本に作る。○其余一に「以下空白」

二十九日 水 十七日

三十日 木 十八日

三十一日 金 十九日

米代理公使を訪ふ。其昨年一昨年の外務省出版の各国派出公使領事往復書を借るを約す。○其領事に添書をもらふ。蓋し当地貿易事務などのしらへ方を聞んとて也。○今晚フーステンサケン氏を訪ふ。其館夏の寓「」島にありて水に臨み森近により好風景なり。

八月一日 土 二十日

志賀ウィルノえ行く。ゴスケウイチ氏を訪ふ也。ハトロスキーも又暇を得て暫時加養外出。○サケン氏、朝鮮魯西亜対訳字書を送らる。前夜借覽を約せし也。

二日 日 二十一日

三日 月 二十二日

米領事ブリカデールゼ子ラルポムーツを訪ふ。不在也。名刺を残して帰る。

四日 火 二十三日

又米領事を訪ふ。面して貿易形況を問ふ。近日其報書を草するに付、取しらへ中之よし故深く不問。後日を約して帰る。○此日英領事をも訪ふ。名はミツチエルといふ。十四年来此に住すと云。よく事情に通し著書も数々あり。其一書を借り来る。我公使の大使に謁を乞ひたる続き未決の事を談し、近日報あるへき筈也。

五日 水 二十四日

米代理公使と式部官員カツシニと、晩に來食するの約あり。米代理公使はフィンに在りて病ありとて電報して辞し來れり。此夜「」園に戲を觀業を聞き半夜まで徬徨して帰る。市川、榎本および予也。

六日 木 廿五日

志賀帰る。

七日 金 廿六日

○本草園に至り、春夏秋冬の草樹花艸果菜より雪山氷野の草、熱炎地

の花まで在らざるなし。往くは小艇よりし、帰りは小汽船よりす。又便也と云へし。

八日 土 廿七日

ゼルマン大使館書記ウォルテンスレーブエン氏に手刺を投し、同大使の足を傷けるよしを聞き、見廻をのべ名札を置く。アルベンスレーブンは、未だ固より帰来せずとの事也。大使面謁の都合をも聞んとせるなれとも、明後日ならては帰来せずとの事故空帰。

○此日メクレエベルク公使の新婚の事のために来たり。七日之返礼として名刺を送る。宿はホテルムーフ也。英領事も尋ねけと不在にて空しく帰る道々本市街へ徘徊し、物買て帰る。○コーカンの使節来り。同しく晩食す。

九日 日 廿八日

十字の車を取りザルスコイセロにポシエト氏を訪ひ、転してパウロースクに至りセレヨクイ氏を訪ふ。ポシエト氏は、近日其新職のユア卿官宅へ転居すへしと云。ゼリマノイ氏は不在。妻と妹氏に面し瓜を伴食す。四字半の車にて帰り、馬車にてワジメル親王の大傳アトミラールボク氏に近遊し同車し帰寓。榎本氏よりボク氏にコロニスタッドの水路の間あり。其略本島の左右え皆船を遣るへし。今は石を沈め水底に畳を築けるに均しく、其左手僅に水路船を遣るべきもの一道を余せり。其上多くの堡を築き尚衛船を置かれは外敵船の侵入又不可為と云。

十日 月 廿九日

ホテルクランスに会食す。パシノの招に応ぜる也。コカン使節、其他

道路掛り官員、学校プロフェスフルなど五七人来会せり。我党は榎公使に市、志と予と従えり。

十一日 火 卅日

志賀、英領事ミツゼル氏を訪ひ、大使面会の都合を問合す。月曜日午後一字と定む。

十二日 水 卅一日

昨日米代理公使来訪、暫時話して帰る。

十三日 木 八月朔日

ボンペ氏来着す。ホテルデムーフに投宿す。

十四日 金 二日

晩コーカン使節館に会食す。榎本、市川、志賀在り。パンタ氏は周旋方たり。其余、外務電信道路等之諸官員も来会せり。○夜石島に戯を見る。榎、志同車馬あり。

十五日 土 三日

亜細亜記筆記如例。小児工場へ入るの規則案「」氏の草せるものをゴーロスに読む。一昨夜ボリスの壺人兵学校付のドクトルを殺し財を奪わんとして未成るに、市軍トレポフ氏既に其場に臨む。賊不可逃を知り自殺せんとす。押えて捕らふといふ説をもゴーロスに見る。

○山内維納転勤の達書を示す。

○断髪之油類を買ひ○寝衣を誂らへ襟紐三を買ふ。○ギリキ公使某書記官某に手帖を投す。○夜エトソン氏を新宅へ訪ふ。庭園あり。家屋又美なり。

十六日 日 四日

中亜細亞誌を読み○米公使領事往復数件を読む等〔以下空白〕

十七日 月 五日

十八日 火 六日

榎本ウエストマンに面して樺太殺人一件を談せんと、市川をしてサケン氏に談せしむ。問て後答へきを約す。

十九日 水 七日

市川サケン氏に面し答を聞く。サケン氏に任して談判を開くへしとの事なりとして明日を約して帰る。

二十日 木 八日

山内生維納え発車。

今日、榎本公使午後一時より亜細亞寮にサケン氏と談判す。彼はウェルツキー筆記し、我は市川通弁也。予は筆記を托されたれとも今日の事甚た事にしからぬ方よかるへしと辞して随行せざりし也。

二十一日 金 九日

二十二日 土 十日

此日我輩の乗たる船は「乗合は「今日コロンスタットに四拾余艦のレヴウあるへし。皇帝および皇族も之に臨み新婦君も来臨するへしとて人々多く、予は未だコロンスタットを見されは、志賀と伴ひ英吉利河岸へ至り船を取らんとするに、既に発したるとして海軍士官のため備えたる船と御坐船の外見えされは、此海軍士官へ備たる中に同船を乞ひペトルゴフ沖まで行し時、雨天に付延たるとして空しく帰る。

二十三日 日 十一日

二十四日 月 十二日

二十五日 火 十三日

此日我輩の乗たる船は「乗合は「過日のレヴィウ今日に定られたり。依て志賀を伴ひ行て見る。三十九艦を三列に並へ其間を帝艦往来するに従て、水夫を帆棚にあげ祝声を発し樂を奏む。帝スウェツラ号（曾て日本に來れり今アレキ親王此艦長たり）に乗御祝砲各船より三十一発。尤砲是より多きは毎砲一発モントールの如きは合三発を限とす。砲台も同しく三十一発及び毎砲一発を放つ。船数三十九砲皆数八箇より発するなり。天地に轟き烟海を掩ふ。

二十六日 水 十四日

二十七日 木 十五日

メクレンブルグ侯の息女「マリヤ」、皇帝之二男「ウラジミル」親王へ嫁す。今日ペトルブルグ入輿。市中昼は旗を掲、夜は灯を掲げ歓声如沸。冬宮入行列金塗馬車十数輛、歩騎兵数千皆我党の初て見る所也。○ゴルチャコフ侯の宅を交際諸官の謁場に供せらる。依て我党も是より見たり。○市中は一円に棧敷を構え、窓は人の顔を以て塞き街衢不可行程なり。

二十八日 金 十六日

今年十二時半より交際諸官皆冬宮に至る。文武諸官又在り。宮中拝礼あり。ギリキ教とプロテスタント教と夫妻両宗なるによれり。皇帝皇后其他諸皇族皆在り。細君の親侯夫婦も來られ宮中の裝飾其美可驚。

○今夜又冬宮に至る。文武諸官皆在り。帝及び姻族新婦君も皆伴て諸官数百千の間を往来逍遙し、其所彼所に留り目さしの人に折々物かたりなとして入御なれり。其間懇篤交を重んずるの意も又顕れたり。

○今日の式は皇家の大礼我皇帝も同しく祝儀を述給ふべき程なれば、必然列なるへしとおもひしに、昨日まで招請の状来らざる故、疑を起し志賀をしてウエルツキー氏に問合せしに、トルコ大使今春婚禮の席に帽を脱するを否み席上為に事あらんとするに至りし事あり。是彼の礼節によると雖も、我教法神拝式の席に不可犯の事たるを以て、若しトルコ大使重て脱帽を否むならば招請すまじとの議あり。トルコ若し招請の列にあらずんば、日本も果して東方国の部に在るを以て同しく招請あらざるべき乎との説あり。志賀答て、日本の脱帽を礼とするは東方諸国中自ら差異あるを見すや。他国の事は我知る所あらざれども、我礼のトルコ、ペルシヤなどと異なるは貴下も又知る所なるにと申置たり。然るに、尚教法も異なりたれば神拝席えは請招なき歎も知れず。尤、今伺中なればやがて勅裁あるへしと答しにより、帰り此事を告ぐ。予おもふ、今日の事は皇家の慶事也。教法は僧侶の所司、皇家交際上妨障をなすべきものにあらす。やかて招請来るへしとおもふに、夜に至て聞く所あらす。故に、再びウエルツキーに面して其故を語らんとするに、同氏不在を以て更にバロン、ヨステンサケンが「」島の寓所を訪ひ、昼間の所聞と今に至て招請を受ざるを告げ其故を詰りしに、バロン頗に其礼の不当を悔て此詰問を受けるを辱ちて、今夜若し招請なくんば、明朝必らず別になす所あらんとすとして明朝相見を約

して帰る。十一時半頃式部寮の来書を得て開見れば、明日十二時半婚禮に冬宮の礼拝堂へ会すへし、夜八時半又冬宮のホールに会すへしとの招請状に、朝夕の諸礼儀式を乗せたる冊を三綴添て来せり。然れども、其招請の体尚欠る所あるか如き故、明朝ハロンの来るを待て決せんとなす。翌朝八字過ハロン来り問ふ。故に其昨夜半落手の事を述べ、同氏の奔走を謝て又其欠るか如きを糺し、別に志賀を式部に遣りこれを明にし、午後公使初予等皆伴て冬宮に至り婚禮に会す。トルコ大使後れて来り。礼拝堂戸外まで帽を被りなから来る。戸者帽を脱すへきを催す。大使脱す。書記官等從て脱す。此時土耳其大使満面紅をなす。○儀式は僧侶の所司故、十字架を拝し神水を額に注ぎ手を吸ふなど皇族一体同様の手数ありて後神前に進み拔式(脱カ)など永々しくあり。此間、新夫妻君并立し其頭上に宝冠を捧けたり。其ウラジミル親王の宝冠、捧けたるはアレキシ親王なりし、其余くは敷書に暇あらす。○土耳其大使の其自国に於て非礼とする脱帽を否む能わす、曲て他国之礼に従ふもの、折衷時の宜しきを取るものとは云えども、国君に代て外国に在る大使たるもの、上へ忍ふべき歎忍ふへからざるべき歎、必竟(国治の深淺開化の遅速)国力如何に在るものたるものを顧みて、礼を曲て時宜を折衷する、又甚た難きものならずや。これを以ておもえは、我日本俄に衣冠を改め坐立の礼を革めたるなど、走りて遠方の礼を学ひ、近隣の附合には却て如何あらんなどおもひしも、皆眼光短かりしにて此改革ありしかため、一度も二度も三度も忍ねはならぬ屈辱を免かれ、怒らねはならぬ憤を免かれたるは其益少なすとおもわる。

二十九日 土 十七日

明日ウラシミル親王其后に奉祝の謁見あるへき由、式部報知あり。且、夫より直に冬宮に於て后親メクレンブルグスユウリン侯に謁すへき筈、曾てセルマン大使より打合ありたり。

○榎本公使より上野え電信を送り、六月三十日の令奉しかたきを申送る。

三十日 日 十八日

一時ウラシミル夫婦王に謁す。了て直に冬宮に至りメクレムブルク侯及夫人に謁す。○夜^大ホルショイ^戯シント^場ルに演戯あり。皇帝及び新夫婦君及皇親皆臨まれ、内は三等以上諸官妻子を引て臨む。別に海陸軍佐以上の官皆臨み、外にして交際諸官皆臨む。又妻娘を引く。

三十一日 月 十九日

九月一日 火 二十日

寺見をバクステインか家に、六ヶ月間月々五十ルーブルにて托するを定む。茶と灯と洗濯を除き二時間稽古。室と食とは皆交合也。

二日 水 二十一日

三日 木 二十二日

四日 金 二十三日

八月十一日箱館に独逸領事ハーベルを害せしは、秋田県下の田崎某なりし事、品川より申来す。

五日 土 二十四日

六日 日 二十五日

○鮫島へ書を送りてラーヴァンの宿所の如何を問ふ。

○品川書を来しラーヴァンの宿所を報す。未確故に仏に問えり。

○英書記官スコット氏をフランスホテルに訪ふ。

七日 月 二十六日

○当アレキサントル帝千八百五十六年八月二十六日モスコに於て加冠礼ありし十八年也。寺々鐘を鳴らし家に旗を掲、野に見せ物を出し園に飾を掲く。

○昨日、家信を別仕立にして横浜郵便局を経て大阪へ送り、中村え滞欧の都合相談の書を出す。香川、小原、長嶋、好本宛て今日又同事件相談書を出す。塩田の事も頼遣す。

重直より書を得たり。丁抹に来るは未定也といふ。○返書に香川の来書を添て昨朝可送様認る。

○書翰紙及筒を買ふ。価合拾九ルーブル、十セン也。

○今夜を以てブルンチリーの万国公法の口訳を初む。ボンベ蘭語口訳、榎本和語口訳、同氏及予筆記、但し一霄を隔て、夜に読へしと定む。

○今日山田え四月十六日歟十九日歟に、ラヴァンに同伴せし事覚たるや否問合遣す。

八日 火 二十七日

○今日松田え新聞紙も香川の書も添て遣す。

九日 水 二十八日

今夜ブルンチリーを読む如例。

十日 木 二十九日

○裘をあつらへ造らしむ。価合二百六十五ルーブル。

○地図局に至り、中亜細亞図シベリア図各一枚を買ふ。別に「」氏に日本記を買ふ。

十一日 金 三十日

○当帝アレキサントル名付日として市中彩旗花灯の飾、見せ物類広小路に集る如例。今夜フルンチリーを読む如例。

十二日 土 三十一日

十三日 日 九月一日

○渡邊え近況台湾始末を伝告せんと書を發す。

○ミルジャハキム、コカンの使節にて此地に久しく留りしか、明後日去るとて暇乞に来る。

○ワステンサケン、ウェルツキー、ミルシヤ、エキムえ名帖を置いて帰る。公使同道也。

○農業メジユムのプロフェッソルグルシヨフ氏をも訪ふ。

○今夜ブルンチリーを読む如例。総論中第三まで終る。

○今朝より川水高く、尺毎に砲を鳴して之を報す。凡て六回を聞く。風あり海より来る。

十四日 月 二日

○松田え書を送り近況台湾事情を告ぐ。

○市川君「」氏がシベリヤ紀行を読む。榎本君と同じく聞く。

○十五日 火 三日

○郷信を得たり。太郎歩行を始めと記す。

○松田翁大坂に在りと聞く。

○渡邊書を來し清和事情を論し來せり。○山内十九日十六日のペリウ公使へ行し事の明了ならざるを對え來す。又國務年表をも來す。○香川、宮崎より書を得たり。岸鉄の牛來は來たれとも算違えりといふを聞く。○堀江琉球より書を來す。返書を書く。

公館非常用意金を三月廿日龍動東洋銀行本店にて繰替たりとて戻し入たれば、其より申來せと外務大藏より予へ申來る。

○今日上野苑榎本より電信を送る。去月廿九日の電信返事なきは、花房の取極用られたるなるへしと申送る。

十六日 水 四日

昨日接到せる用意金一件、此方にて受取し事はなけれど、若し何歟知れる事も在らん歟と今朝市川と伴ひ Messrs Blessig & Co. に到りて問ふに 8th Desem. 1873 6 Letter of Credit は No23/20 にて横浜認なり。其クレジットの事には、本年三月九日付横浜認の書、同四月廿八日付龍動認書翰あれとも、右クレジットを以後榎本武揚名前にて可受取との事にて、右金は誰にも渡せし事なく、渡せしと東洋銀行え申遣りたる事もなしといふ。故に、今日書翰案を送り、榎本氏より寺嶋氏え其事を申送り、併て右クレジットの本年十二月に至て終るを以て日限後代用すへきもの送り來され度をも認入たり。

ブルンチリーを読如例。

○此節ゼ子ウに会せるイントロナシヨナルインスチチュートラフローの會議に我在伊公使河瀬真孝宇氏も連れるに付、一日會議中統領なる

伊太利の有名法家モンセニ氏論し起して曰ふに、凡古以来万国公法を論するもの、耶蘇教国と教外諸国を区別する事甚しく、譬はエキスタラテムリトリヤルジュリスジクシヨンの如き平民に無権あらしむるは、必竟唯教外国にのみ行わるゝものなり。然るに此事元其人民の風俗法律の慣習等の異なるによると雖も、抑教法の異なるによるもの多しとす。然るに今日、同教諸国と雖も其風俗を慣習を異にせる事甚しきものなきにあらず。日本の如きは教外国と雖も、近來其風俗多く同教諸国に類似するもの多く、殊に万国公法の条理を弁じ其事を奉せんとするの意我党に異ならざるものあり。既に今、此会河瀬氏あるか如き以て其証とすへし。然れば今後、万国公法を論するに教内教外の別を立す、唯其風俗慣習刑法法律等の相同しきを取るを以て勝れりとするもの、如し。果して然らば、其教外国に約する如何すべきを詳細論究せするへからすとの論ありて、尚委曲を論すへしと見ゆ。嗚呼、河瀬氏の此会に列せる。必竟一言可否を述るに非らずと雖も、又天下人心を動すに与り力あるへし。一挙一動最可用意事也。

十七日 木 五日

○今日大坂へ家信を認め、沓通は外務省を経、沓通は郵便局を経て明日差立る積り。○成田へ写真封入沓封、香川、小原、宮崎、好本、井上、堀等へ沓封連名外務省へ托して遣す。これにも又家信を加え、堀江への一封も加ふ。

十八日 金 六日

○昨日の書郵便局へ可托分を出す。

○ペリウ代理公使ソイエルヴァン氏に宛たる書面を封入し、品川え書を送り其届方を托す。榎本公使よりの書也。

○午後仏公使館より書を落手す。ソイエル氏の宿所書送り来す。

○ペリウとの書類為取替方に付、本省打合の書類を起草す。

十九日 土 七日

○昨日落手せる宿所書を品川え廻す。

○ブリュセル会議之案訳成る。其前後の新聞も訳し、併て外務省へ送るべく用意す。

○去十五日の電信文写も今便に遣す。

二十日 日 八日

○一昨日出しかゝりたる郷信、今朝漸く全く成る故に発す。

○午後本野の書を得たり。○本邦外務省より数字の電信を得たるに、読不能とて榎本へ尋に越せしなり。早速に解意直訳を添帰し遣さる。

今度の電報はアルムスロン六門、曾て海軍省より注文せるを早く廻せとの事を云越せるなり。

○去月中旬以来軍艦兩三艘買入れ之事、横浜に在る英字商某々等に相談したるに付注意せよとの事申来れとも□致方なしと云。

○過日来揃置たる書類も得たるとて送り来せり。但し未落手。

○英に公使来るべきを電報あり。文字文章分明ならねと、多分上野ならんとの等も申越す。

○今夜書を越し、本野え艦及び大砲之事など都合によりては此方にて考ありと告置く。

○今日はレーツニースード夏園之終りの逍遙とて、旗燈火の設けあり。電気火光をあやつり、樓閣状の幕に映せしむる様類^④の美事なり。

二十一日 月 九日

○ラヴァレ氏に去十八日差立たる書面の内に「目録中に朱朱せし書類といふ語の次に(此方えお送り可被下候) 其余の書類は日本政府へ御送り可被下候と書するを遺失せし段、別書を以て断り遣す。但し品川え頼む。前日之ものと伴ん事を欲して也。

○マリヤルース一件書類為取替之事に付、若しペリウ公使との間に間違出来て、此地え一切之書類送り来したる節之事、本省へ打合之書翰を草す。但しこれは、去る十八日に草せしを改草せし也。

○昨日午後三時三十分^⑤に本省より発せし電信今朝十落手す「ペリウより書類落手前は、貴下之手にある書類の外彼方え送らざるへし。次の米郵便船より彼方へ云送すべし」とあり此文中Tといふは寺嶋の略語歟と見え、書送すといふは、花房か取極許可之上其約により六ヶ月中に彼方へ書類送らるゝもの歟とみる段、本省へ返詞書面案を作る。

○併せて是に入るへし。渡邊え書を送る。

二十二日 火 十日

○十七日上海出電報蘭新聞に在るに、台湾一件日本支那の紛紜未定と云ふ。「タイムス」にも載せて同し。

○ペリウ代理公使バリーより書を来し、目録に朱せしを加え其朱引し書類を送り来せり。仏文なれば写し置本省へ廻す積り、写字生を雇ふ。○秘号電信にて瑞典のミタイレウルと和蘭に在る蒸氣器械および船な

と如何と尋て本省へ遣るを榎本より送らる。

○午後本草園に遊ぶ。榎本市川と伴ふなり。落葉風に飛び気花霜に傲^⑥るさま夕日疎鐘に從て傾くなと感慨交生す。

二十三日 水 十一日

○十八日出版のタイムスに、日本政府ニウヨルクとマダラス及び「」と三艘の蒸氣船を四十五万弗にて買ひし事見え、リゼンドルがアモイにて捕われたる事など見ゆ。大久保が発せしは、ゼンドル捕われたる事知れたる直後と見ゆ。吉原某徒ふとあり。横浜税関司長なりと云、不知誰たるを。

○夜、ワジメルワンチか家に躍茶会に赴く。其老祖母の誕辰なりといふ。

二十四日 木 十二日

松田え老翁の表書と、香川、宮崎之書とを封入して明日発するに備ふ。

○西、杉山、新居当にて学問向の事、少し書て送るへきをも同様に認む。○「以下空白」

朱引書類之中英文あり。筆工を雇ひかねて今晚榎本公使と余と市川とポンベ氏と分て書く。

二十五日 金 十三日

昨日の書余しを書き、其読合せをなす。

二十六日 土 十四日

明日出す様に、昨日までに書せしマルヤルーズ一件関係書類を纏め、朱引目六は残し置、其附属書類一切之本書と来翰之写し返翰之写とを

添封す。○今日、此書類差立る事の電信を寺嶋殿宛榎本氏より出す。

内に、去る二十日の電信寺嶋より榎本宛たるは受取、其意にては花房の取極は政府許可ありしと見ゆるとの語を添置けり。

○新居、杉山等えの書簡も別に直当にして明朝出。一同出す。○松田へのも同断。○家信は別に書せず。寺見の書の裏に、一筆書付て無事を報し置。

○古川常一郎工学校に入る事之都合少し差支ありげなる故、今朝志賀をポシエト氏工部卿に送り助成を乞ひ置。

二十七日 日 十五日

今朝公信二十六号マリヤルーズ一件第六回書を出す。但し秘魯代理公使来す所の朱点書類を送れるなり。

○今日フィンランドに遊んとす。偶、驟雨来電と共に来る。且、汽車の时限を誤りたる故、歸りて新聞読て暮らす。

○夜「」芝居へ行く。志賀と「」と伴ふ也。

二十八日 月 十六日

午後比得城南の緑樹陰中に散歩す。

二十九日 火 十七日

午後、市川、内藤と伴ひ市中を遊歩し、レーフ字書を十二ループルにて買ひ、裘を合す。袖を縮しむ。○帰路髪を刈る。

○ブーセーの書出しの間違をウイルショウに行て、既に書を書せ市川に頼てブーセーえ送る。○半途チヨレートを飲む。

○夜、キニャージガリツチン之女兒二人の名付日なるを祝し、菓子

小箱を持行く。これは其頃日田舎より帰来せるを訪ひかたくなり。

○山内勝明維納より来る。○渡邊秘電を借らん事を乞えるあり。同人支那に争ひの事に付て自意あり。本野へ申送らんとする所あるよし也。

○佐野常民君、近日中維府を去んとするとして別詩を送らる。

君尚名都接衆英吾今遙路就帰程曾遊共発長崎港同仁相逢羅馬城強国究図着冷眼一霄閑話尽其情婆心寄語請須記成事由来在至誠

三十日 水 十八日

十月一日 木 十九日

二日 金 二十日

三日 土 二十一日

今午後比得堡を發し、フィンランドに向て發す。五字発車、於ウイボルグ汽車駅經「」ヴォルスト四時十五分を過ぎ、徐々としてウイボルグに着く。ホテル「」に泊す。

四日 日 二十二日

曉起駅車を買ひ、山路を經り長溝大湖に従ひサイマ湖に至り午飯。転してイマタラ瀑布に至る。

五日 月 二十三日

曉起流に従て下り、籠渡しを渡り松枝之下岩石之上に徘徊し瀑を見、又駅馬を買ひ雨を侵して歸りウイボルグに至り、ホテル「」に投しバロン「」の（モン「」）我廬を見、歸りて晚餐を喫し又汽車に乗りて、夜十字半比得堡に帰着す。

六日 火 二十四日

○英書林に至り日附字書とウェブストル中字書とを買ふ。○其余シベリヤ及び中亜細亜の事に関せるもの、数多官のために買ふ。榎本氏と伴えるなり。

○ポンベ氏通溝器の少し太きを来し試みしむ。自ら試るも初不成、夜果せり。又朝暮試る事数回すべしと也。

七日 水 二十五日

○一千八百六十七年十月江戸「コンヴェンション」と称るもの、事に付、七十二年より三年に渡りて屢々異論起りし事あり。今度のマリヤルーズ一件と関係あるを以て、其事の始末を概記して外務省に送らんとし草を起す。

八日 木 二十六日

九日 金 二十七日

○シベリヤ紀行を市川の読むを榎本、内藤、予と一日代りに筆記せんとて、今日初て予之を読む。但し榎本氏は昨日既に初しなり。○ブルンチリーを暫く絶たりしを又今夜より復起す(此事七日なりしを誤り記也)。

十日 土 二十八日

今朝金次郎よりの書を得。清和兩國頻に英に注文して兵器の買入れをなすよしにて、三日付の書翰也。三週日支那よりアームストロンに注文し来せる砲野砲二十四門、ガットリン砲六門、九寸砲十二門其他小銃弾丸も無数と云。四五日前日本よりもアームストロンに注文し来れる分を送り出せるもの中、九寸径砲六門は支那注文之分を日本え振替

たりと云。武庫頭末川某、九月下旬日本を立て船艦買入に英へ来ると云電報、マーコロン会社へ来ると云。

○今日昨夜認し家書を横浜郵便局に由て送る。本のえも壹書を龍動に飛し、金次郎にも同しくニウカッスルに送る。○本野えの書中にブルンチリー公法の英訳を聞合を乞ふ。

○ラヴァアレ着、パリより其四日付の書を榎本来し去月十八日廿一日廿四日之同氏之書を落手せしを報し、マリヤルーズ一件書類之為取替方は本国直に互になす事に於て、榎本氏の説には同氏も同意なりと云来す。

十一日 日 二十九日

○本省へマリヤルーズ第七回書翰を認む。榎本氏より秘魯公使に遣りたる廿三号を甲とし、秘公使か榎本氏へ越したる十月五日付書翰を乙とし、六十七年江戸「コンヴェンション」之事に付義質か覚書を丙号として併せ送る事とす。但し明後日可発答。

○宮本、廣津、田邊に宛たる書中に象胥紀聞之事、和韓対訳字書、義質の明治五年の復命書と草果の氣候晴雨寒暖之表を乞ひ置。

○家信は去月廿九日歟認置たるを廻す。○本実院様墓標の文案を草す。

○十二日 月 三十日

二十七号八号公信、および会計号を本省へ認む。

○シベリヤ紀行を市川と読むて筆記す。

十三日 火 十月一日

昨日認たる公信を發す。○家信も宮田廣への書も封入す。

「午後米代理公使スカイラル氏を訪ふ。マルチン氏のコンシエラール
ジュリスジクションといふ書はエジプトの領事裁判未可捨との論より
来れるものたる。○ジョジ、ビンガム氏の所行米政府の斥けられと
なり発令を下して、則各公使と相会議して可成事を等しくしむるを命
せり。而して若し不得已事あらは、米政府に申立差得て後可取扱と申
送れりとの話あり。

○「以下空白」

十四日 水 二日

本省来信あり。明治七年第十四号にて八月「」認なり。本年に至
りて一月以来是に十四翰、未た一度も外務卿の自ら記名せるものなし。
上の、山口両外輔の臨時代理にて定りなく記名せり。如此ありてはレ
スポンシブリーを荷ふ積りありても、見事に抜け口ありそふに見え
て一向に不安心なり。怠慢に出る歟、軽率に出る歟、将真に事を取る
能わさるに出る歟、将に書を裁して其意を問んとす。

○此書に「」の殺人の事件申来れとも当を得ず。

十五日 木 三日

十六日 金 四日

午後プチャチン氏を訪ふ。在らず。

夜、榎本氏、市川氏と伴ひ又プチャチン氏に至り、家族一同にも面
会せり。

十七日 土 五日

○プリンスセレメチーフ氏を訪ふ。同氏不在、細君は病て不面して帰

る。

○プリンス、ガリツチン氏を訪ふ。夫妻とも不在なり。転してウォル
フ氏を訪ひ雑話喫茶。同氏は英仏北京に改入し節、魯公使館書記官と
して北京に在りし人にてゼ子ラールウィグナチーフの下に勤め、今は
病臥七年也。

○英吉利クロブに晩食す。

十八日 日 六日

○毛帽子誂らへ○工部卿ボシエト氏を訪ふ。夫妻に面す。

ドクトル「」氏に二拾ルーブルを送りて初度治療の労を謝す。

十九日 月 七日

○晩、銀煙草入成りて持来る。四十ルーブルなり。

○晩、ペトル堡辺に散歩し小舟を購ひ流を横りて帰る。榎公使、市文
と同道あり。

○夜ブルンチリーを読如例。

二十日 火 八日

○毛帽子成る。価七十ルーブルなり。

○バトロスキー来る。

二十一日 水 九日

二十二日 木 十日

二十三日 金 十一日

二十四日 土 十二日

午後サケン来る。明日マルチンスに同行すへきを約す。

二十五日 日 十三日

十二字サケン氏に至る。志賀を伴えり。サケン氏と同じく歩いてマルチンスを訪ひ公法論を聞く。同氏は当国有名の万国公法プロフェッサーなり。

○今夜プチャチン。ポシエト。ウエストマン。スツレモウーホフ。ヲステンサケン・ウエルツキー。コローラシヤ。ウイシベルグを晚餐に会す。

二十六日 月 十四日

郷書を認む。皆明日発する也。

○寺嶋氏へ内啓を發す。

二十七日 火 十五日

本省より公信到る。朝鮮近況、内地旅行談判略、星亨用字誤語之一件、英館コンスタブル拘引一件、等之書類来る。

二十八日 水 十六日

夜「」クロブエマスカラードを見に行く。男は正服し女は仮面を冑り、雑沓千余人竟束な誰か柚山の人そとよと詠しけん古もおもひ出ける。

二十九日 木 十七日

三十日 金 十八日

三十一日 土 十九日

十一月一日 日 二十日

午後マルチンスを訪ふ。マリヤルーズ一件書類を持ち往て見せしむ。

○トルコに在る領事館之事。○エジプト領事裁判改革新裁判所の事なと聞く。此事に付ては此人著述あり。曾て上梓せり。魯ゼルマン両語にて記せり。

二日 月 廿一日

○ゼルマン代理公使バロンアルベンスレーベンを見る。

三日 火 廿二日

天長節に付、門戸に旗飾を表し一同正服して賀儀を述ふ。晚公使館一同および書生等一同会食。○食後アレキサントルスキー劇場に志賀、内藤を伴ひ観る。

四日 水 廿三日

○昨夜、金次郎への書状を書し明日発す。

○公信来る九月八日認なり。「台湾一件主意書来る」明治八年上半年分之公費金払金も来る。予か月給は七百五十五円を送り来り。七百五拾円を留守へ廻したりと在り。然れとも五百円は英え松田へ送り、余は皆此方へと送り置たる故後便にて又送り来る歟とおもひ、一応齊藤等迄為念其事申遣し置書面明日認。

五日 木 廿四日

六日 金 廿五日

○柳公使へ書を裁し、上海に品川氏を経て北京へ送る。

○金次郎に家信を送る。

七日 土 廿六日

○金次郎家信を送り来す。

○直三郎への書を小原に托し、転学之事ままに決すへしと申送る。

八日 日 廿七日

公信三十、十一、三十二、号を日本へ出す。

○別啓にして寺嶋卿え、ウランガリー氏賜物之事會て申立たる通りにして下さる歟、又は功牌を下さる歟と云送る。○此便より齊藤へ返事方同人の名と会計掛りとを宛五百円又は七百元を英へ送り来し方を頼み遣す。蓋しこれは先般編輯の書翰会計当にて遣したるに記したれば、今程は届きて其望通り扱ひくれたるへしとおもひ電報にはなさず。

九日 月 廿八日

十日 火 廿九日

今日午後より河水漸く益し、夜に至りて愈々高く十五分毎に放門処の号砲半夜に至て音を絶へす。

十一日 水 三十日

昨雨未霽。午前雪を飛す。屋上寸許積て白きを見る事数時「列氏一度華氏卅三度より、晩に至ては二度華」になる。

○今夜、志賀を伴ひウエルツキーを訪ふ。不在。転してラステンサケン氏を訪ふ。頭痛鉢巻せり妹等と同じく暫時話して帰る。

○オーリエントタルコンGRES来九月朔日より二週間比得堡に会すへき筈なりといふ。

○スタチスチックマンGRESのプログラム及びレポルトを得ん事を約し置。

十二日 木 三十一日

水点上巻度。雪花菲々対岸比特城塔白或堆「以下空白」

十三日 金 十一月朔日

○晩歩ヴムボールを追遙すれば、兎戯既に雪舟を遣るを見る。

○ブルンチリーを読む如例。○鮫島に書を送る。来る十八日發程帰朝すへきよしなり。

石丸、野村書をパリーより来し、宛を告げ救を乞ふ。其故を知らず故に辞したり。去れとも、郷里の人若し真に困難の事あらは見捨へからざる情もあれば、別に書を公使館の中の厚東え遣りて、若し兩人が救を乞ふ事ありて真に可救筈の困難ならば、千フランク以下の金を為替て遣りて呉れと頼み遣し、尚兩人へ若し真に難逃難義との事ならば、中の、厚東に行て情を述て処置を乞べしと申遣す。英は金次あり、魯に寺見あり。何ぞ仏に如此人の奔を助る筈あらんや。

十四日 土 二日

終日、雪降り且止む。空は皆白し。

○晩雪中を歩いて英クロブに往く。ウエルツキーあり。ゲ子ラールアンニンコワあり。其他両三名の知人あり。不記名。ゲ子ラール「」を見る。セクレットポリスの頭なり。又ゲ子ラール「」を見る。此人はセバスポルの砦を築て高名なる人なり。

○榎本公使今日を以て樺太島境界の事に付談判を初む。魯はスツレモウーホフなり。通弁は市川也。魯の筆記はウエルツキーにて談は亜細亜局に於てす。

十五日 日 三日

午後マルチンスを訪ふ。雪霏々、帰路ミツチエルを訪ふ。同氏は不在なるを以て名帖を残して去る。

十六日 月 四日

C.J.A.Galmons に明晩より初めて一週三四回の仏語会話を習らふを約す。一會ニループルを以て約を定む。

十七日 火 五日

午後スカイラル氏に過日借りたる新聞紙ルスキーミルを返す。留守故残して帰り、々々路を迂りてゲリッチン侯とセレメチーブとを訪ふ。皆不在。名帖を置いて帰りかけヲラロスキーの従兄陸軍中佐ヲラロスキーを訪ふ。夫妻とも快き人なり。

○バトロスキー「カフカス」剣を贈らる。

○午後将に出門せんとする時ガリチン来らる。明後晩六字伴食の案内あり。榎本氏にも面会し話中、中亜細亜の事におよび米人マクガハンの旅行記を借らん事を約せらる。予持行かんと約せず付直にこれも持行たるなり。

○明晩はマロイテートルにゾアルの生命といふ題の戯あり。これは今より前「」年「」明晩バトロスキーを伴ひ行て見るを約す。

○今晚バルキンスのレストーレントに晩食す。

十八日 水 六日

○今晚マリンスキーテートルに皇帝の生命といふ戯を観る。此戯は「以下空白」

十九日 木 七日

○今朝、氷片前河を掩ふて流れ来る汽船の往来絶え、逃れと欲して不能の船ありて中流に揚るを見る。

○今晚プリンス、ガリチン、に晩食す「バロンローゼン、」「」相伴なり。

○帰後沐浴散歩。

二十日 金 八日

○今朝氷河を掩ふて中流僅に流動す。然も唯氷野の岸を帆走船上より望むか如し。

二十一日 土 九日

今朝は流動止み、一昨日は流船の往来尚在し所を歩者の行きて氷を碎き平らし車道に備ん用意にかゝるを見る。

二十二日 日 十日

二十三日 月 十一日

二十四日 火 十二日

二十五日 水 十三日

二十六日 木 十四日

二十七日 金 十五日

二十八日 土 十六日

午後レンチ氏を訪ふ。同氏は昨日其弟と共に北京に発せんとせしに、老母の死に逢て其行を未果也。予は之を吊せし也。

二十九日 日 十七日

三十日 月 十八日

十二月朔日 火 十九日

郷信到る。宮本、香川、小原、塩田憲の書を得たり。

二日 水 二十日

三日 木 二十一日

去月廿七日上の英に公使として往く道に羅馬へ到り、中井、立田を書記生者して同道せりとの事とも桜田、立田より申来せる書翰を落手す。

四日 金 二十二日

○今朝 Via America にて大坂大人え書を出す。

○明日可発郵便を認む。英国に○上のと中井と松田、金とに送たる也。
字費一件の香川往復を送り返事を乞ひ置

五日 土 二十三日

今日習らしの原に整兵あり。皇帝親臨せらる。蓋し独逸皇子「一」之響旁此挙ありしなり。時に雨降り。雪上に流れ観の美を欠くと雖も又更に壯を加えるものあるか如し。歩騎砲合三万余騎兵の裝飾勇壯最可見ものあり。

○明日可発郵便を認む。

宮本、楠本、新居、香川(学費之事之申来しありし故謝詞と返詞と依頼とをなし置、小原、森津山)

○家信をも認め大人え学費の云々と細君へ語学の事とを云遣す。

六日 日 二十四日

七日 月 二十五日

○本野の書を得るに、金次郎に二拾封取替の事承知せりといふ。

○中野、厚東の書を得たる。中に石丸、野村の書を封入し其窮真なり

助力を要すとの事を云来し、石、野、両生の書に五百フランクなくては立行かたしと云。故に明日可送様五百フランクを調え為替にす。

八日 火 二十六日

中野宛五百フランクを為替にして廻し、別に石丸、野村への書をも封入し、中の、厚東え達し方を託し遣す。

○今日はセイント、ジョルジのラルデンをカタリナ帝の創定せられしより百〔五〕年の年期の祭式なりとて、上下貴賤此ラルデンを佩るものは於宮中響燕^(響)を賜ふといふ。此ラルデン四級の別あり。其最上等は、兵に将として欧州の首府を攻て陥し入る、ものにのみ与るを許すと。故に今此ラルデンを有せるは、当魯帝と独逸帝(其仏に克ち巴里を陥入れる故)とこれを有するのみにて、当魯皇弟及び奥帝は其二等有せり。此一等を得たる魯の帝は、カタリナ後当帝を除くの外ある事なしと云。

○渡邊の書を得たり。訳、末川独逸に来しん由を云、其他数件。

九日 水 二十七日

○渡邊え返翰を今夜認め明朝送るに備ふ。

○本野えも一昨日落手せし書翰の一応之返詞を認め明朝可送に備ふ。

○マルチンス書を来し、廿九日夜一字茶会に招かる。志賀をも伴へたしとの事也。

○返書を作る。会に趣くへきを答ふ。志賀も又従へしと諾せるよしを添詞す。

十日 木 二十八日

十一日 金 二十九日

今晚マルチン氏の招に趣く。バロンジヨミニ、バロンラスステンサケン、米代理公使シカイラル氏等同席。古今に渉り一世を議し學術政事の事に及ぶ。恨らくは魯仏之語に通せずして談多く此両語によるを以て予か解せざるもの多し。

○去る四日のゼルマン議院にてババリヤ議員「一氏外国交際の事を論し、近來独逸輒もすれは外国之内事に関係し戦を招くか如き事ありとの激論あり。ビスマルク氏これに答て其非を論し語甚た激烈罵罵これに次くに至れり。就中最激せるはビスマルク侯の語に先頃クルマンなるものキッシンゲンに我を害せんと謀りし時、予自ら彼に問ふに何の故を以て我を害せんと謀るそと問ひしに、彼等かカトリック党のため予か今日所握の権所執の法不可なる所あり、故に殺してこれを除んとせるなりと云えり。然れば彼等は諸君中のカトリック党を助けんとせるものにて即カトリック諸君の党といふへしとの語ありしによる」

○十二日 土 三十日

拾九号公信到来。

○小原、塩田義憲君司法に百余名の除官中にありといふ。

○加藤次郎、別に檄文盟書を添たり。

○宗巖君辞表未經裁。

○細君岡山より大坂に帰り来れりと。幼児益健なりといふ。

○十三日 日 十二月一日

○五百円は英に廻し余り二百五拾円をポンドにして此方へ廻し来る。これにて松田の明年の学費、此頃本の借たる分、および予の明年半年の俸給も皆済なり。

十四日 月 二日

○加藤の書と副書と巖君の書、および直三郎の書とを併せて金次郎え送る。

○桜田へ小書を送る。上野との談を洩ん事を催す。

○本間に書を送り直三郎の同人え贈之書を送す。

○青木へ書を送り直三郎の様子を聞。

十五日 火 三日

○「以下空白」

十六日 水 四日

○志賀の誕辰なりとて戯観るに伴わる。小芝居に行く。スカイラル在り。

十七日 木 五日

○樺太殺人一件の覚書浄書。

十八日 金 六日

○樺太嶋殺人の件に付、亜細亜寮へ可送覚書仏文翻訳とも成る。和文は予浄書し、今朝別に公使の小書翰を添、予亜細亜寮に持行く。頭不在、権頭亦不在。故にウェルツキーに渡して帰る。

十九日 土 七日

明日駆虫剤を用ゆへしとてけふより断食し、唯ハルリン(ニシン)と

葱とを少しく食す。

二十日 日 八日

今日、柘榴根皮の煎剤を用ゆ。午後カストルライルを用ひ又下腹丸を用れとも終に効なく空しく兩日の断食をなせしのみ。医ボンペ氏曰、柘榴根皮陳腐用に適せざりなりと。

二十一日 月 九日

今朝「」号公信を発す。

私信は

○寺嶋え来秋帰れはシベリヤを経へき筈也。若し家内の都合かつくならは今兩三年歐洲に居たき念願を告げ「以下空白」

○伊東に金次郎の事を謝し宗巖のことも云副置。

○家信には金次郎、寺見等か学費、明年中は他人の助力を要せぬ等申遣し、明後年の分本所との助力を仰く旨も申遣し置。

○津田弘道には雪籠りも又可なり。実歴経験に在わされは事不可成事等を申遣し置。

○二十二日 火 十日

○二十三日 水 十一日

今朝、青木及早川よりの書を受取。青木の書は直三郎之事を云事なり。

○去三日スツルーウェ氏弁理公使となりし事を聞きアン子ンコワ氏に賀を述へに行。青木にスツルーウェより托せるものなきや聞くを托せらる。

○二十四日 木 十二日

アン子ンコワ明後日曜日アン子ンコワ氏に晩食に招かる。

○今夜鮫島より一書を受取。書中ジプロマチックのガイドを著せり故送ると云事と暇乞となり。

○二十五日 金 十三日

アン子ンコワの請に随ひベルリンに電信を送りて青木へ尋ぬ。価は二十語に付一ループル八拾八コピーキなり。

樺島殺人の件に付、過日遣したる書付に文章の書改めを請ふとて、過日来兩三度ウェルツキー来りて公使と談せり。今日其改むへき文定り浄書を再す。

二十六日 土 十四日

○晩、寺見来る

二十七日 日 十五日

○今晚アン子ンコワの招に赴く。ポウコウンク某「」アン子ンコワ夫妻、カーリチン夫婦及び児等皆老アン子ンコワ□の凡に別せり。

○帰路ボシエト氏を訪ふ。

二十八日 月 十六日

○今晚より、久しく打置たりしブルユンチリーを読む。

○中野、厚東十二月廿四日の書を落手するに、予か本月八日に出せし五百フランクを石、野両生に付したりと。

○石、野両生又書を來し、其落手を報す。

二十九日 火 十七日

三十日 水 十八日

三十一日 木 十九日

○此日天色晴朗冬来所未曾有。公使と市川コロンスタッドの堡岩を巡覧。予は家居。

○夜仏語会、魯国七十三年と四年との輸出入比較表と東方論の好機と題せるタイムスの一章を訳す。又斯理牙近況を記し、来明治八年新正賀書に添て外務省の寮友に送り又鶏牛会の諸士に寄するに備ふ。